

香川県埋蔵文化財調査年報

昭和59年度～昭和62年度

1988.3

香川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和59年度（1984年度）から昭和62年度（1987年度）に、香川県教育委員会が発掘調査及び発掘調査指導を行った遺跡の概要集である。
2. 本書に掲載した遺跡の概要は各年ごとに収めたが、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査については、4年度分を一括して収めた。
3. 本書に掲載した遺跡の位置は年度ごとに示した。
4. 各年度の埋蔵文化財保護行政・調査の概要は各年度当初に一覧表で示した。
5. 本文頁は通し番号としたが、挿図・図版番号は遺跡ごとに付した。
6. 遺跡の配列は、県教委主体の調査、市町指導の調査の順とした。後者については原則として東から西の地域への順とした。
7. 昭和58年度末に測量調査を実施した川東古墳の調査概要を昭和59年度の項に収録した。
8. 香川県教育委員会事務局文化行政課職員が発掘調査指導を行った遺跡は、各市町の了解のもとに収録した。
9. 各遺跡の位置については、国土地理院発行の25,000分の1及び50,000分の1の地形図を使用した。
10. 各項目の編集は執筆者が行ない、全体編集を國木健司が担当した。

目 次

昭和59年度	1
昭和60年度	31
昭和61年度	47
昭和62年度	75
四国横断自動車道埋蔵文化財調査概況	97
普及活動から 埋蔵文化財調査報告会	157

昭和59年度

昭和59年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況	2
(1) 間宮古墳	6
(2) 国分台遺跡	7
(3) 大麻山挽貨塚古墳	11
(4) 高原城跡	14
(5) 次見遺跡	18
(6) 中寺発寺	21
(7) 南草木遺跡	25
(8) 竹田遺跡	27
(9) 川東古墳	30



遺跡位置図

59年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	名 称	遺 踪			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
1	与島しのだ地区	坂出市与島町西方	散布地	旧石器時代	瀬戸大橋架橋に伴う事前調査
2	聖通寺山地区	坂出市常盤町	城 蹤	室町時代	〃
3	田尾茶臼山地区	〃 八幡町	散布地	旧石器時代	〃
4	角山地区(岡宮古墳)	〃 川津町	古 墓	古墳時代	〃
5	下川津地区	〃 川津町下川津	集落跡	弥生時代～室町時代	〃
6	聖通寺城跡	綾歌郡宇多津町	城 蹤	室町時代	テレビアンテナ建設に伴う事前調査
7	金藏寺下所遺跡	善通寺市金藏寺町	〃	奈良時代・平安時代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査
8	稻木遺跡B地区	〃 稲木町	〃	弥生時代～平安時代	〃
9	稻木遺跡C地区	〃 〃	集落跡 墳 墓	〃	〃
10	中村遺跡	〃 中村町	集落跡	平安時代・室町時代	〃
11	乾遺跡	〃 〃	〃	鎌倉時代～江戸時代	〃
12	上一坊遺跡	〃 吉原町	〃	弥生時代	〃
13	矢ノ塚遺跡	〃 吉原町、碑殿町	〃	弥生時代～室町時代	〃
14	西碑殿遺跡	〃 碑殿町	〃	弥生時代	〃
15	深尾石棺群	三豊郡三野町大見	古 墓	古墳時代	〃
16	道免1号窯跡	三豊郡三野町大見	窯 蹤	飛鳥時代	〃
17	四ッ塚2号墳	三豊郡豊中町大字等田笠岡	古 墓	古墳時代	〃
18	延命遺跡城岡地区	三豊郡豊中町上高野	集落跡	弥生時代・鎌倉時代	〃
19	延命遺跡八反地地区	〃	〃	弥生時代～鎌倉時代	〃
20	一の谷遺跡群	観音寺市本太町古川町	〃	弥生時代～江戸時代	〃
21	石田遺跡	〃 池之尻町石田	〃	古墳時代～室町時代	〃
22	長砂古遺跡	〃 池之尻町大長	〃	弥生時代～平安時代	〃
23	柞田八丁遺跡	〃 柞田町八丁	〃	古墳時代	〃
24	森広遺跡長原地区	大川郡寒川町甲1968ほか	〃	弥生時代・古墳時代	県道建設に伴う確認調査

(1)

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
本四公団	248	県教委	本四公団	発掘調査	57条の3	小西,坂口	59.5.7~59.6.15
〃	300	〃	〃	〃	〃	小西,安藤	59.12.13~60.1.18
〃	140	〃	〃	〃	〃	小西,坂口	59.11.5~59.12.12
〃	202	〃	〃	〃	〃	小西,松野,安藤 坂口	59.9.3~59.9.27 60.1.27~60.3.30
〃	2,125	〃	〃	〃	〃	松野,安藤	60.2.6~60.3.31
〃	60	〃	〃	〃	〃	安藤	59.11.5~59.11.20
道路公団	7,700	〃	道路公団	〃	〃	廣瀬,薦田,河野	59.4.1~60.2.28
〃	12,000	〃	〃	〃	〃	真鍋	59.9.17~60.2.8
〃	3,400	〃	〃	〃	〃	野中,西岡,中本	59.4.1~60.3.30
〃	9,000	〃	〃	〃	〃	真鍋	59.7.3~59.9.17
〃	200	〃	〃	〃	〃	薦田	59.11.29~59.12.25.
〃	400	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	4,800	〃	〃	〃	〃	藤好,薦田	59.10.18~
〃	3,000	〃	〃	〃	〃	廣瀬,河野,中本	60.2.4~
〃	500	〃	〃	〃	〃	東原	59.9.11~59.10.23
〃	100	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	800	〃	〃	〃	〃	真鍋	59.4.16~59.5.14
〃	1,000	〃	〃	〃	〃	岸上,池内,真鍋 片桐	59.4.1~59.7.18
〃	10,000	〃	〃	〃	〃	岸上,池内,片桐	59.5.19~
〃	2,500	〃	〃	〃	〃	岸上,真鍋,片桐	60.2.18~60.3.4
〃	1,200	〃	〃	〃	〃	真鍋,片桐	〃
〃	1,200	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	100	〃	〃	〃	〃	〃	〃
県	50	〃	県	〃	98条の2	東原	59.11.29~59.12.10

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
25	团子出窯跡	綾歌郡綾南町陶5399	窯 跡	平安 時 代	埋立に伴う確認調査
26	大麻山椀貸塚古墳	善通寺市大麻町字岡	古 墳	古 墓 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
27	向井西の岡遺跡	観音寺市中田井町 天神岡	集落跡	弥 生 時 代	圃場整備に伴う確認調査
28	国分台遺跡	綾歌郡国分寺町国分台	散布地	旧石器時代	遺跡内容把握のための確認調査
29	森清古墳遺跡	大川郡大川町富田中 字森清537番地	古 墳	古 墓 時 代	道路建設
30	高原城跡	香川郡直島町833ほか	城 跡	室町時代 ～江戸時代	県道改修に伴う事前調査
31	古田2号塚	香川郡香南町大字池内 字中筋194-1	塚	室 町 時 代	圃場整備に伴う確認調査
32	奥谷池遺跡	高松市西山崎町1321	散布地	古 墓 時 代	農道整備に伴う事前調査
33	ガラ池周辺遺跡	高松市木太町256, 258	条里制	奈 良 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
34	南山浦古墳群	高松市西春日町 1385番地1ほか	古 墳	古 墓 時 代	農地改良に伴う確認調査
35	古宮権現古墳	高松市鬼無町山口307	〃	〃	学術調査
36	讃岐国府跡	坂出市府中町字本村 上所5133-4	官衙跡	奈良時代 ・ 平安時代	住宅建築に伴う確認調査
37	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺国分 字上所	寺院跡	奈 良 時 代	史跡整備に伴う確認調査
38	〃	〃	〃	〃	現状変更に伴う確認調査
39	讃岐国分尼寺跡	〃	〃	〃	〃
40	次見遺跡	綾歌郡綾歌町富熊 字次見、字宮ノ前	集落跡	弥 生 時 代	圃場整備に伴う事前調査
41	郡家経塚	丸亀市郡家町3576番地	経 塚	江 戸 時 代	墓石移転
42	彼の宗遺跡	善通寺市仙遊町二丁目	集落跡	弥生時代 ・ 古墳時代	河川改修に伴う事前調査
43	中寺廃寺	仲多度郡琴南町造田 字中寺・信が原・作野	寺院跡	平 安 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
44	備中地遺跡	仲多度郡琴南町造田 桃の尾	集落跡	弥 生 時 代	〃
45	矢ノ岡2号石棺	三豊郡高瀬町大字上勝 間2397番地	古 墓	古 墓 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
46	南草木遺跡	三豊郡仁尾町大字仁尾 字南草木乙431-1	包含層	〃	倉庫建築に伴う確認調査
47	竹田遺跡	三豊郡豊中町大字笠田 竹田1054	集落跡	室 町 時 代	圃場整備に伴う確認調査
48	縁塚・山原古墳群	三豊郡大野原町大字丸井 縁塚、大字福原原山原	古 墓	古 墓 時 代	土砂採取に伴う確認調査

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
個人	50	県教委	県	発掘調査	98条の2	東原	60.2.18～ 60.3.31
県	800	〃	〃	測量調査	〃	東原, 池内, 中西	60.3.22～ 60.4.9
一ノ谷池 土地改良区	400	〃	〃	発掘調査	〃	中西	60.1.22～ 60.1.23
県	1,000,000	〃	〃	分布調査	57条の4	渡部, 中西 町教委職員	59.3.26～ 59.12.12
大川中部 開発組合				現状保存	57条の6		
県	150	県教委	県	発掘調査	57条の3	町教委職員 発掘指導 渡部	59.6.8～ 59.6.23
香南町	50	町教委	香南町	発掘調査	98条の2	町教委職員 発掘指導	59.11.1～ 59.11.30
県	350	市教委	高松市	立会調査	57条の3	市教委職員	59.11.1
高松市	60	〃	〃	発掘調査	98条の2	〃	60.1.21～ 60.1.25
〃	8,000	〃	国・県・高松市	〃	〃	〃	59.7.16～ 59.12.28
香川大学	20	香川大学	香川大学	〃	57条	香川大学	59.7.12～ 60.3.31
個人	400	市教委	県・坂出市	〃	98条の2	市教委職員 発掘指導 東原	59.5.24～ 59.6.15
国分寺町	3,500	町教委	国・県・国分寺町	〃	〃	町教委職員	59.10.2～ 60.3.22
個人	153	〃	〃	〃	〃	〃	59.8.6～ 59.9.24
〃	300	〃	〃	〃	〃	〃	59.6.15～ 59.7.28
綾歌町	1,300	〃	綾歌町	〃	57条の3	町教委職員 発掘指導 中西	59.11.1～ 59.11.30
個人				現状保存	57条の6		
県	3,635	市教委	県	発掘調査	57条の3	市教委職員	59.4.1～ 60.3.31
琴南町	300	町教委	琴南町	〃	98条の2	町教委職員 発掘指導 中西	59.4.18～ 59.5.15
〃	10	〃	〃	〃	〃	〃	59.5.18
高瀬町	6	〃	高瀬町	〃	〃	町教委職員 発掘指導 高橋邦彦	59.11.16～ 59.11.17
個人	40	〃	県・仁尾町	〃	〃	町教委職員 発掘指導 中西	59.7.13～ 59.7.25
豊中町	450	〃	県・豊中町	〃	〃	〃	59.6.7～ 59.7.3
大野原町	100	〃	大野原町	〃	〃	〃	60.3.4～ 60.3.31

岡宮古墳

所在地 坂出市川津町 調査期間 昭和60年2月27日～3月30日

瀬戸大橋から南へ延びる国道30号線建設に伴って実施した調査である。岡宮古墳は、角山の標高約25m前後を測る南西緩斜面部に立地し、横穴式石室を埋葬主体とする古墳である。墳丘は削平を受けほとんど残存せず、形状・規模等は不明である。

石室は羨道と玄門部がすでに消失し、奥壁の一部と玄室床面の敷石の一部が残っている状況であった。石材の抜き取り穴からすれば、基底石は奥壁が2石からなり、東西壁は3石以上で構築されている。石室のプランは概ね長方形を呈するが、抜き取り穴の状況からすれば玄室奥壁部がもっとも広く、玄門に向かって狭くなっていることと西壁の玄門よりの部分には、わずかに玄門石の抜き取り穴と考えられる痕跡があることなどから片袖の横穴式石室の可能性が高い。玄室幅1.4m、玄室残存長2.8mが確認できる。

石室石材には安山岩が使用されている。床面の上位には全体に5cmの大の小礫が敷きめられ、玄室奥半部では小礫の下位に20cmの大の安山岩角礫が敷かれている。この安山岩角礫の玄門よりのものは大形で規則的に並んでおり、意図的なものであることは間違いない。排水溝等の施設はない。遺物は玄室奥の西部と玄室の玄門よりの部分に別れて出土している。前者は副葬品の一部と考えられ、須恵器の杯身・長脚2段透かしの高杯・提瓶、須恵器以外にはその周辺から鉄鎌・耳環・滑石製白玉が出土している。後者的一群は石室外にも広がっていることと中世遺物も含まれていることから、石室に伴うものではなく、横穴式石室の再利用時のものと考えられる。

岡宮古墳の南約1kmには、下川津遺跡があり、本古墳が築造される6世紀後半に一致して集落が営まれはじめるのは注目される。

参考文献

香川県教育委員会「III 岡宮古墳の調査」【瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(VII)】

1986・3



岡宮古墳位置図



第1図 岡宮古墳石室

国分台遺跡

所在地 坂出市高屋町・神谷町・淡路郡国分寺町

調査期間 昭和59年3月・4月(第1次) 59年12月(第2次)

高松市・坂出市・国分寺町にまたがる五色台の南西部に位置する国分台遺跡は、石器素材であるサメカイト原石の产地として知られると共に、石器・剝片等を多量に包蔵する旧石器時代の大規模な遺跡として著名である。しかし、遺跡の大部分は陸上自衛隊演習場であり、昭和34年3月に岡山大学などが一部の発掘調査を行った(未報告)のみで、遺跡の範囲、包蔵状況等は明確になっていない。

そこで香川県教育委員会では、遺跡の現状を把握し、今後の保存策を検討する資料を得るために、陸上自衛隊善通寺業務隊・高松防衛施設事務所の協力を得て、昭和59年3~4月、

12月のうち5日間、現地踏査を実施した。

その結果、台地上平坦部から一部斜面部にかけて多量の石器・剝片等を探集し、広範囲にわたる遺跡の広がりを確認した。以下にその概略を紹介する。

国分台遺跡は、地形から国分台・朱雀台・赤峰台に分かれている。

国分台では演習用道路が縦横に巡り、爆破訓練のための退避用土塁や塹壕など、地形の改変が著しい。平坦地の縁辺を中心にして118点(ナイフ形石器39点、翼状剝片35点、同石核10点、尖頭器8点など)の石器を探集した。

朱雀台は、緩やかな丘で部分的に芒の繁茂が見られるが、殆ど地肌が露出し、風雨による侵蝕及び掘削も著しい。総数89点(ナイフ形石器36点、翼状剝片15点など)を得た。

赤峰台は広さの割に散布が希薄で29点を得たのみである。

また、中央部を西に下る谷筋の南岸に平行する演習用道路では、パラスを敷きつめたように石器や剝片などが散布している。

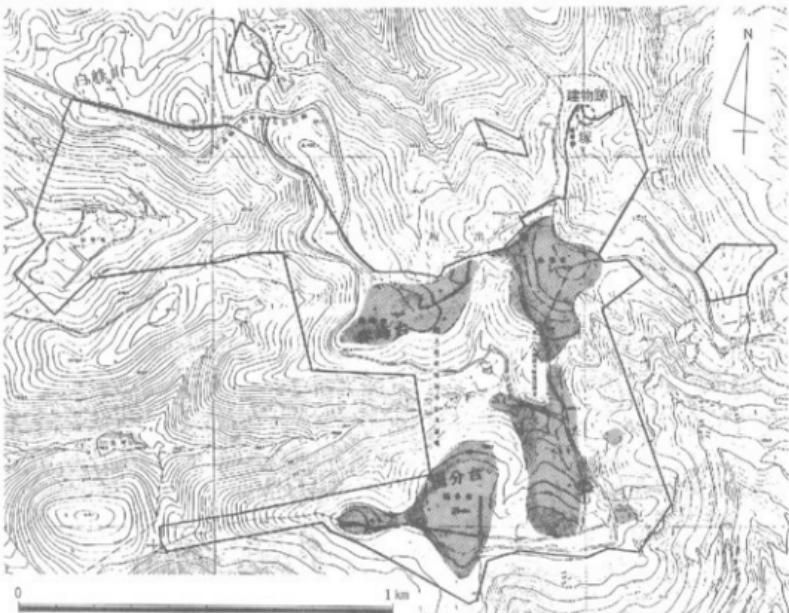
一方、県道以北では石器の散布は殆ど見られなかった。用地北端に散策路が横切っており、付近



国分台遺跡位置図



第1図 石器などの散布状況



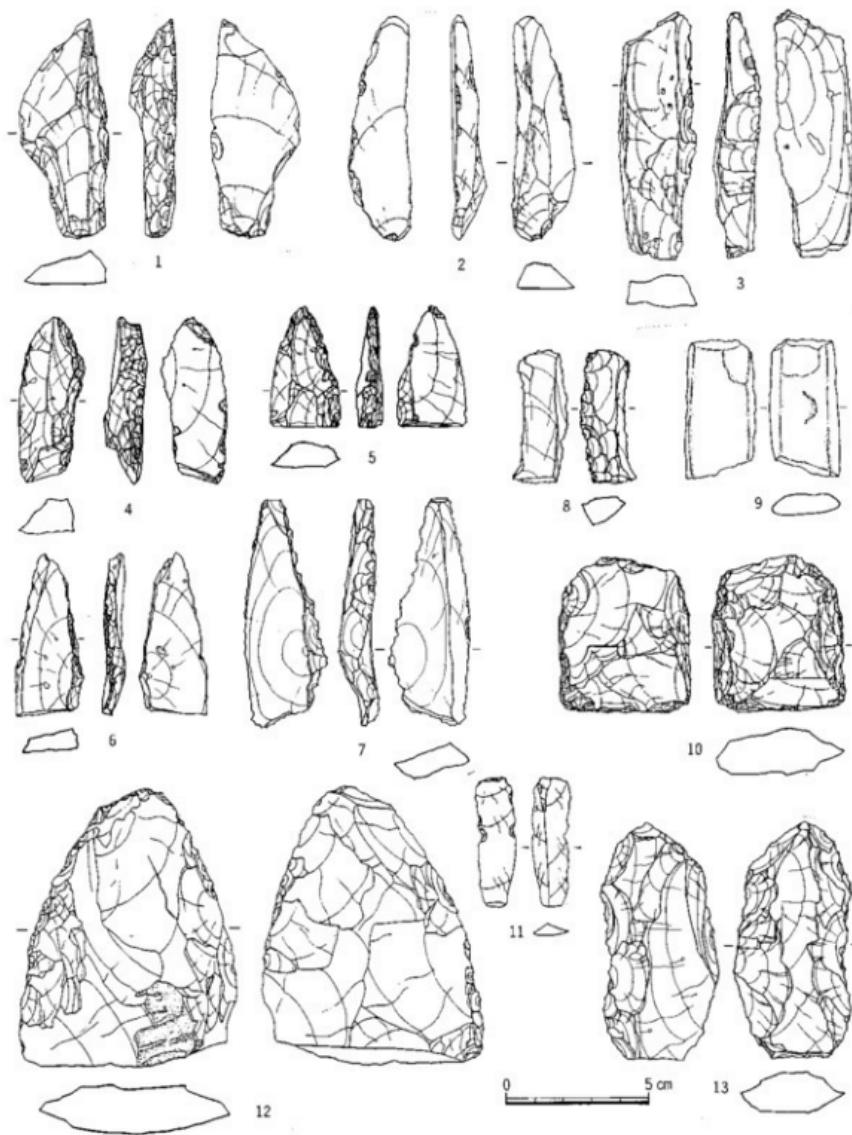
第2図 昭和59年度調査対象地全体図 (アミ…石器採集範囲)

で建物基礎の石列や井戸・石垣・土堀跡などを確認した。状況から近世以降の遍路道に関わる建物ではないかと推察されるが詳細は不明である。また100mほど南の斜面に、周辺に散乱するサヌカイト塊を用いた径1~2m、高さ0.5m程度の不整長円形を呈する塚を3基確認した。その性格は不明である。

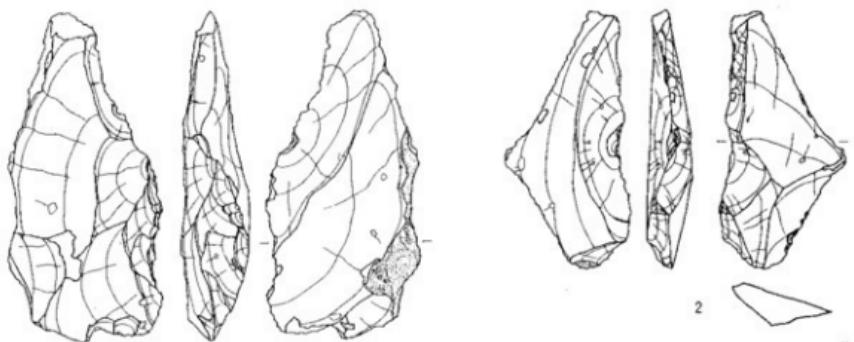
以上が踏査結果の概略である。採集資料は270点を数えるが、ここでは紙面の都合上、ごく一部を紹介するにとどめる。

第3図1・2は縦長剝片素材のナイフ形石器である。1は出刃状を呈し、全長7.9cmを測る。広島県冠山産サヌカイトを使用している。3・4は国府型ナイフ形石器、5はいわゆる宮田山型ナイフ形石器であろう。6・7は翼状剝片である。8は2次調整をもつ剝片、9は叩石である。10は楔形石器、11は縦長剝片、12・13は尖頭器である。第4図1・2は翼状剝片石核、3は大型の横長剝片石核で、全長20cmを測る。

今回採集した資料には国府型ナイフ形石器、翼状剝片及び翼状剝片石核が多く、270点のうちの60%を占めるが、地点によって若干器種構成が異なるようである。



第3図 採集遺物実測図(1)



1

2

3

0 5 cm

第4図 採集遺物実測図(2)

大麻山椀貸塚古墳

所在地 普通寺市岡2563-1

調査期間 昭和60年3月22日～4月9日

大麻山椀貸塚古墳は、大麻山（標高616m）から東北東に派生した尾根上に立地する積石塚前方後円墳である。大麻山山腹は、高松市石清尾山塊及び坂出市綾川下流域と並んで積石塚古墳が集中する地域であり、学術的価値が高いことから、従来から継続実施している重要遺跡確認調査の一環として、上記の日程で墳丘測量調査を実施した。調査にあたっては、普通寺市教育委員会及び地権者である金刀比羅宮の協力を得た。

本墳は主軸をN-36°-Eにとり、前方部を南西の尾根上方に向けている。全長は39mを測る。後円部直径20m、高さは2.8m、くびれ

部の幅は7.5mである。後円部からくびれ部にかけてはほぼ平坦であるか、前方部でやや高くなる。前方部端部の幅は推定13.5mでやや擴形に開く。高さは1m程度である。なお、西端は崩落により本来の形状を留めていない。

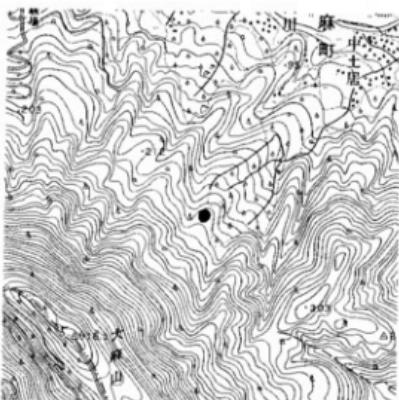
前方部は、尾根を切断して花崗岩風化土の地山を整形した上に比較的小さめの安山岩塊石を薄く積んでいる。各所で地山が露出しており、当初から葺石状に置いたものと考えられる。

後円部は、人頭大以上の安山岩塊石を多く用いて築成している。後円部東側墳頂近くから基底部にかけてと中央部・やや北寄りには盜掘坑とみられる崩落と窪みが見られる。北端では墳頂からかなり下方まで連続して塊石が散乱し、測量によつても墳丘基底部と判断できる地形の変換点は見出せない。ただ、後円部西側の崩落した220.5mコンターライン上と同側くびれ部に、鶴尾神社4号墳同様に板石を3～4枚重ねた列石が認められ（第5図）、また南東側くびれ部でも大型塊石による列石が存在することから、後円部先端における220.5mのコンターラインを後円部の基底部と判断した。なお段築は確認できなかった。

後円部積石の用材は殆ど安山岩塊石であるが、花崗岩塊石のほか、拳大の円礫も多く目につく。

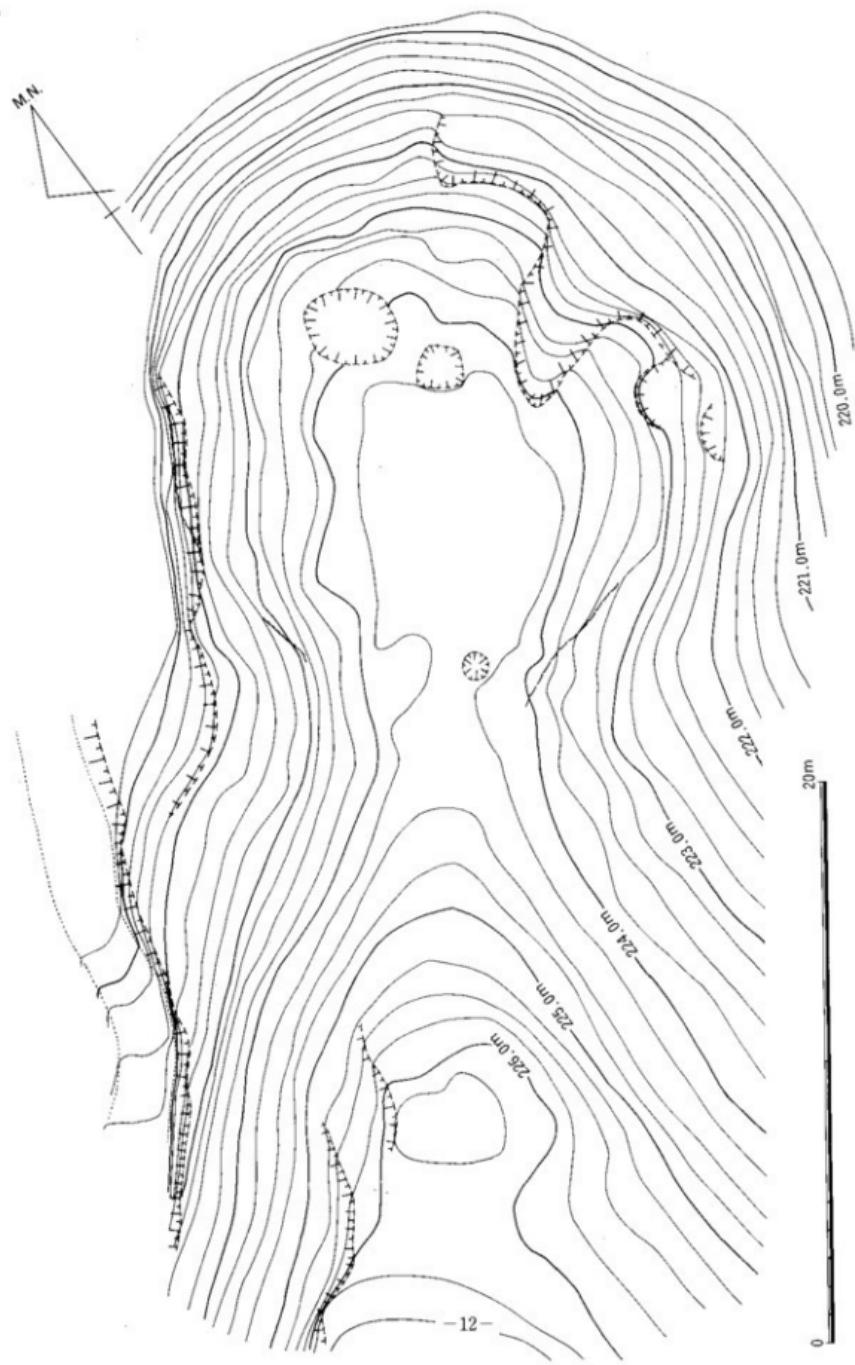
埋葬施設は不明であるが、後円部中央で東西に長いわずかな窪みが見られることから、讃岐の前期古墳に一般的な東西に主軸をとった竪穴式石室が想定できる。

なお、調査中に後円部墳頂部で土師器の尚坏脚部の破片（第3図）を採集した。坏部と脚端部を欠いている。器表面は荒れているがナデ調整と思われる。内面は各方向へのヘラケズリ痕を残



大麻山椀貸塚古墳位置図

第1図 大草山炮賀塚古墳地形測量図



す。灰黄褐色を呈し、1mm前後の石英粒が多く含む。時期は不明である。

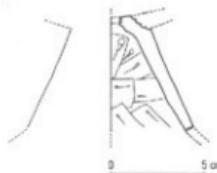
他に土器、埴輪等の出土の報告はないが、一般的に後期古墳に多い「楕円墳」の名称をみると、かつて土器が出土したこと反映しているのではないかと思われる。

以上の結果、大麻山楕円墳古墳は、坂出市爺ヶ松古墳や普通寺市野田院古墳同様、前方部を地山整形（または盛土）の上に葺石、後円部は積石による築成であり、後円部の径が全長の約 $\frac{1}{6}$ を占めるという共通性をもつことが明らかになった。また、前方部の端部が撥形に開く、讃岐の古式古墳に一般的な特徴をもつほか、高松市鶴尾神社4号墳に見られるくびれ部の割石積みによる埴輪列石が本墳にも認められるなど、注目すべき成果を上げた。ただ、今回の調査は埴輪測量のみであり、主体部及び副葬品等、築造年代や被葬者を検討する材料が不足しているため、ここでは古墳時代前期に属すると述べるに留めておきたい。

今後は、実距離にして150mほど下方の同一尾根上（標高180m付近）に立地する積石塚前方後円墳の大麻山経塚古墳（全長38m、後円部径25m。未調査）との関連を踏まえて評価づけるべきであろう。



第2図 墳裾部の推定線



第3図 採集土器実測図



第4図 大麻山楕円墳古墳

（後円部から前方部を望む）



第5図 くびれ部埴輪列石

高 原 城 跡

所在地 香川郡直島町本村

調査期間 昭和59年6月8日～6月23日

1.はじめに

瀬戸内海の直島に所在する高原城跡は、江戸幕府の直参であった高原氏の居城、あるいは居館跡として知られている。

高原氏は戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍し、江戸時代初期には直島・女木島・男木島等の領主であった。しかし、高原氏による支配は、寛文11（1671）年、御家騒動による改易によって終わりをつけ、以後は倉敷代官所の支配となるが、それと共に高原城跡は荒廃し、天明元（1781）年の大火で建物等はすべて焼失したものと考えられる。

ちなみに、安永10（1781、天明元年と同年）

年3月、高原次郎兵衛の順覧による絵図には、当該地に「本丸」・「矢倉」と明記されている。その後城跡は荒廃したままであったが、19世紀初め頃歌舞伎舞台が作られ、戦前まで盛んに上演されていたものの、現在は舞台も消滅している。

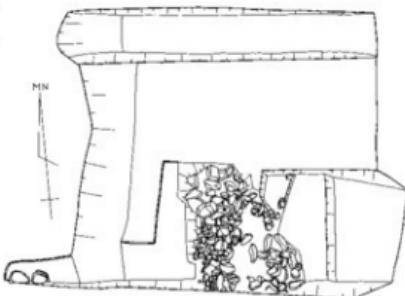
今回の調査は、遺跡地の東麓を通る県道北風戸横浦線の拡幅工事によって、遺跡の東辺が削されることになり実施された。調査は、直島町教育委員会教育長を団長とする「高原城跡発掘調査団」を組織し、直島町教育委員会教育次長小西正一、香川県教育委員会文化行政課主任技師渡部明夫らが中心となって行ったが、香川県土木課・高松土木事務所や、施工担当の石井工業株式会社などから多大な協力をうけた。

2. 遺跡の現状

高原城跡は直島東南部小丘陵上の北端に立地する。城跡の北と東は海であり、東側には狭い水道を挟んで向島が横たわる。また、西麓には江戸時代から続く本村の集落があり、南側の尾根上には、空濠をはさんで護法善神社が所在する。

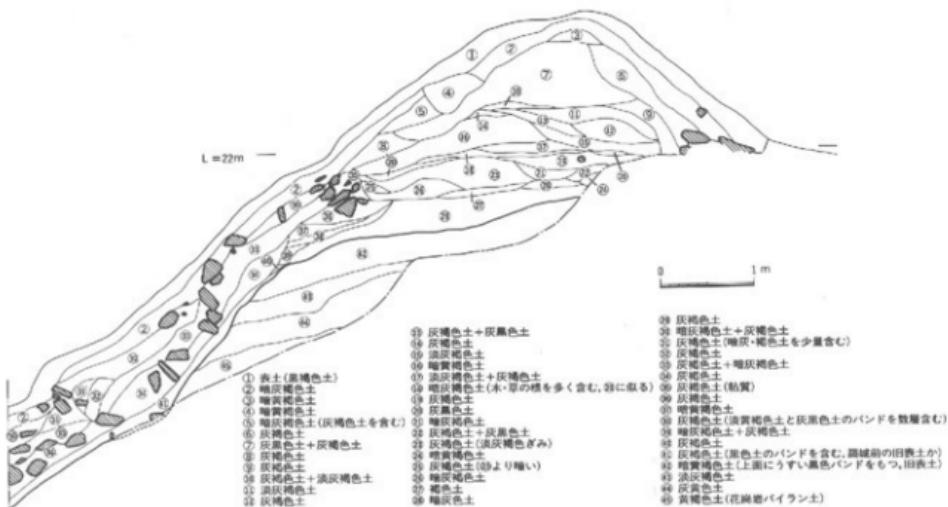


高原城跡の位置図



第1図 Aトレンチ平面図

0 2m



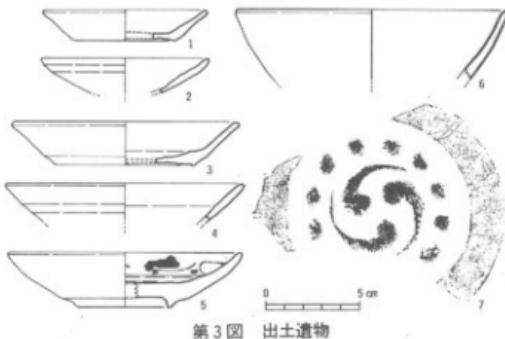
第2図 Aトレンチ南壁土層図

高原城跡には、南北に並んだ大小2つの郭が現存する。今回の調査の対象となったのは大きいほうの南郭で、南北約50m、東西は北側が狭くて約22cm、南側が広くて約26cmの規模をもつ。郭内は平坦であるが、南から北に向かって緩やかに傾斜し、北端付近で標高約21cmである。

南郭の南部縁辺には「コ」字形に土壘がめぐる。土壘は南辺で規模が

最も大きく、中央部で高さ約4mを計るが、東・西辺では北に向かって徐々に低くなり、幅も小さくなる。東辺では約20m、西辺では約30mにわたって盛り上がりが認められるが、東辺では約5m、西辺では約10mを越えると土盛りが極端に小さくなる。また、西辺と南西部には土壘が途切れしており、ここが通路として使われた可能性が考えられる。南辺土壘の南側には、土壘と平行して尾根に直角に掘られた幅5m以上の空濠をもつ。濠の底は土壘最高所から約6m、南側上縁から約1m低くなる。

南郭の北側には、やや東よりに南北約11.5m、東西約17.5mの北郭がある。北郭は南郭より約



第3図 出土遺物

2m低く、南縁中央部には南郭に通じる通路がある。

3. 調査の概要

今回の調査は工事の対象となった南郭東辺部について実施した。しかしながら、東辺の北半部は調査前に削られたため、南半部の土壘部分についてのみ行った。

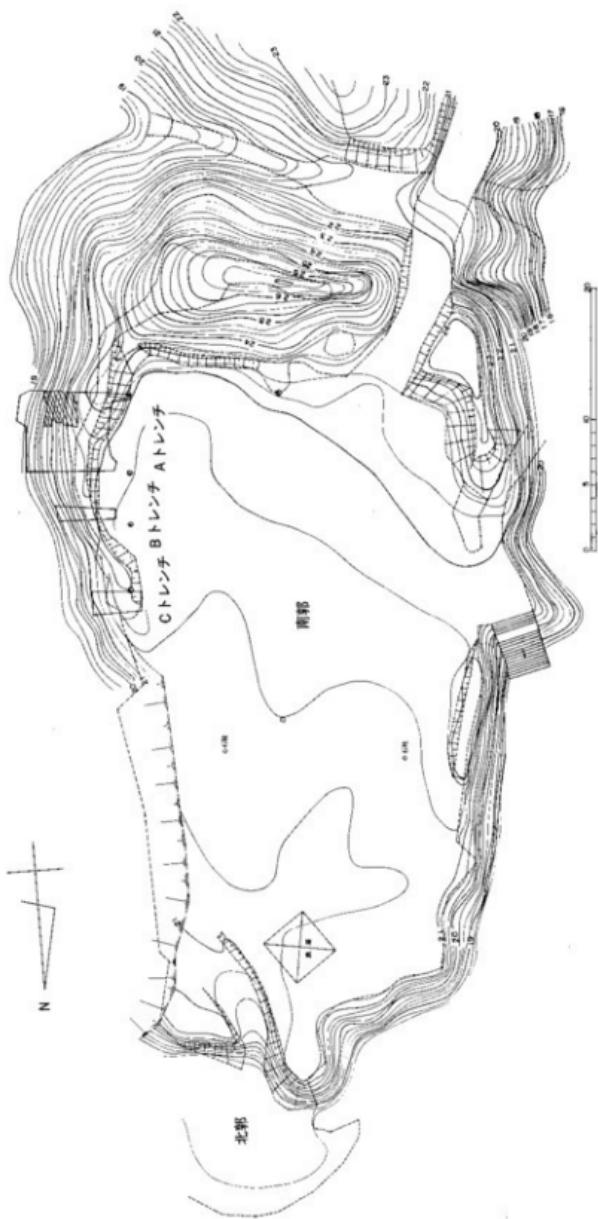
発掘調査にあたっては、3ヶ所にトレンチを設定し、南からA・B・Cトレンチと呼称した。発掘の結果、Aトレンチ南壁では幅約4.6m、内側との比高約1.6mの土壘が確認できた。土壘は旧地表（42層上面）の上面に若干の盛り土（29・36～40層）を行い、内側と外側に根固めの塊石を置き、その内側に各種の土を版築状に積上げている。盛り土の厚さは約2mである。また、土壘外側の流土中にも多数の塊石が含まれるので、土壘の外面に石を貼っていた可能性も考えられる。ただ、根固めの石の積み方が粗雑なことからみて、外面が石垣で覆われていた可能性はないものとおもわれる。

B・Cトレンチでも小規模の盛り土は確認できたが、これが本来の規模かどうかは判断できなかった。

発掘調査と表面採集によって得た遺物は119点である。内訳は、縄文時代押型文土器1、土師質土器47、瓦質土器1、備前焼9、陶器2、磁器11、平瓦27、丸瓦15、軒丸瓦3、五輪塔（部分）3である。1～4は土師器の坏で、1・3・4はAトレンチ南壁の土壘盛り土から出土したものである。3の外底部にはヘラ切りが認められる。5はCトレンチ表土層直下の土層から出土した染付皿で、見込を蛇の目状に釉剝ぎしている。17世紀後半から18世紀に比定できる。6は工事で掘削された斜面で採集された青磁碗である。内外面に灰緑色の釉をもち、貫入が著しい。7は郭内で採集した軒丸瓦で、巴文の頸部が発達していることなどから18世紀以後に比定できる。

4. おわりに

高原城跡は島嶼部に所在する城跡として、また数少ない江戸時代の城跡としてよく知られているが、これまであまり調査が進んでいなかった。こうした状況の中で、緊急調査とはいえ、今回南郭の測量と土壘の発掘が行われたことは特筆される。しかし、今回の調査は土壘の一部に限られ、遺跡の全体像はなお不明のままである。また、発掘では、時期を限定できる遺物の出土が少なかったために、土壘の築造時期も明確にできておりせず、今後の調査の継続が必要である。



第4回 高原域跡測量図

次見遺跡

所在地 綾歌郡綾歌町富熊字次見・字宮ノ前

次見遺跡は丸亀平野の東端、横山山塊から西にのびる丘陵に挟まれた深い谷に立地する。

本遺跡は、団体営土地改良事業の工事中に弥生土器が出土したことにより発見された。工事は谷の奥半分では既に終了していたため、残る地区のうち掘削される5,000m³を対象として試掘を行い、うち1,300m³について本調査を実施した。調査は綾歌町教育委員会が主体となり、県教育委員会は職員を派遣して指導にあたった。

掘削される斜面部のみを対象とし、既に水田の段差を削り、地山に遺構面が露出している谷の南側の北西向き斜面をA地区、北側の

南向き斜面の東西に細長い掘削予定部分をB地区として調査に入った。

A地区では弥生時代後期末頃の竪穴住居跡3棟(SH01~03)と、竪穴住居状遺構2棟(SH04・05)、時期不明の柵列(SA01)などを検出した。

SH01は、調査区東端、最高所に位置する。傾斜地のため、2割程度しか床面プランが残存していない上、重機による掘削中に発見されたため、大きく抉られている。かろうじて下方の主柱穴の底を検出したため全体プランを把握することができた。1辺4.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。東壁の壁溝から中央に向かって溝が分岐して、ベッド状遺構を下りたところまで残存している。出土遺物から弥生時代後期末と考えられる。

SH02は全体の2割しか残存していないが、復原すると直径8m程度の円形を呈すると思われる。やはり壁溝から分岐する溝が、中央ピットが存在したと思われる炭化物・焼土粒集中箇所の方向に向いてのびている。主柱穴は3箇所検出したが、本来は6箇所あったものであろう。弥生時代後期末と推察される。

SH03は最も下位に立地する。旧水田の段差により削られ、全体の4割程度残存する。旧形状は円形もしくは六角形を呈する。現存部分での直径は8.7m、最大径は推定9m程度であろう。山側の壁高は80cmを測る。壁溝から中央に向かって集束する4条の溝が検出された。出土遺物から弥生時代後期末と思われる。

SH04・05は、共に隅丸方形を呈し、前者は1辺3.8m、後者は1辺5.8m程度を測る。SH04は

調査期間 昭和59年11月1日～11月30日



次見遺跡位置図
(丸印調査地点)

2隅にピットを検出したが、直径・深さともに柱穴としては小さい。またSH05では柱穴は検出できなかった。いずれも弥生時代後期末と思われる。

B地区では、2基の土坑（SK01・02）及び不明遺溝2箇所（SX01・02）を検出した。

SK01は長さ5m、幅1.4mを測り、深さ5~10cmと殆ど削平されている。主軸はN-78°-Eにとる。黒色土器塊、白磁碗などが出土しており、中世前半のものと思われる。

SX02は主軸を南北にとった長円形を呈し、南北2.8m、東西1.9m、深さ0.4mを測る。壺・甕・高坏等のほか、鉄製刀子破片が出土した。弥生時代後期中葉と考えられる。

SX01はいびつな小土坑状を呈するが、北隣の調査区外に広がっており、規模は不明である。遺構内外に焼土粒・炭化物が散布し、遺構内からは高坏・甕底部などの他鉄片が、また遺構のそばから鉄斧が1点出土した。土器から弥生時代後期前半の時期が与えられるが、遺構の性格は不明である。

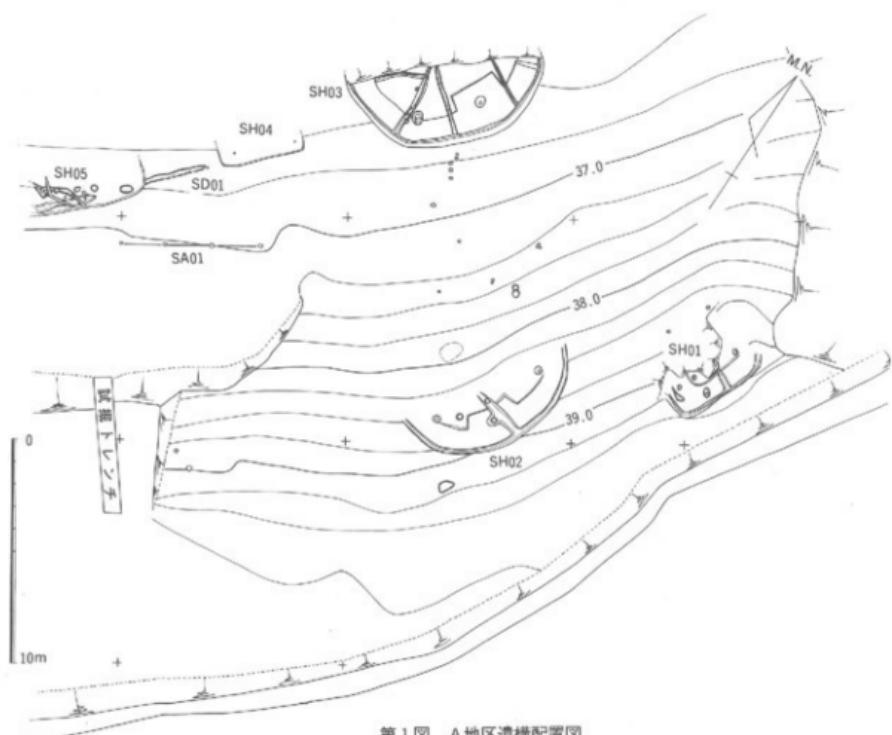
SX02は、不整長円形の落ち込みとピット群からなる。やはり調査区北隣に広がっており、全体を把握できない上、遺構の埋土から遺物が出土していないため、性格・時期は不明である。ただ、上面を覆っていた包含層の遺物の大半は古代～中世のものであり、SX01がその時期の範囲におさまる可能性は高い。

他に、B地区からは3グリッド西半分及び4グリッド東半分にかけての包含層から弥生時代前期の土器が数多く出土した。刻み目をもつ削り出し突帯と重弧文・木葉文をもつ壺の体部や、口縁部の下に数条の平行沈線文をもつ甕などが見られる。遺構は検出できなかった。また包含層中には位置は異なるが若干の中世遺物が混入しているため、上方からの流れ込みと考えられる。ただあまり磨滅していないことから、かなり近い場所に遺構が存在するのかもしれない。

以上が今回の調査の概要である。A地区の弥生時代後期末の集落域は、すぐ上方の斜面から尾根上にかけての果樹園一帯に広がることが予想され、B地区でも弥生時代後期の遺構が検出されただけでなく、近隣に前期の遺構が存在する可能性もある。また、B地区から盛土のため調査の対象としなかった谷底部にかけては、古代～中世の須恵器・土師器が多数散布しており、遺構の存在は予想される。

今後は、残された部分の保存策を十分に立てておく必要があろう。

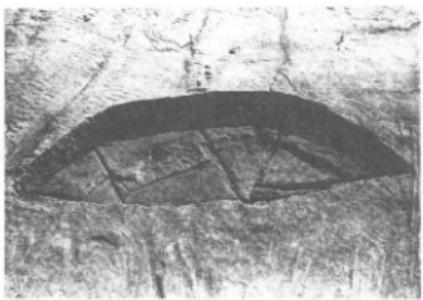
なお、現在調査報告書を作成中であり、町教育委員会から、近日刊行される予定である。



第1図 A地区遺構配置図



第2図 A地区検出遺構 (左・SH01, 右・SH02)



第3図 A地区検出遺構 (SH03)

中寺廃寺

所在地 仲多度郡琴南町造田字中寺

調査期間 昭和59年4月18日～5月15日

中寺廃寺は、讃岐山脈中第2の高峰大川山^{おほかさん}(標高1,043m)の西に延びる尾根から北西に分岐する一支脈上の、溝濃町・仲南町との境界である三つ頭から東に下る松地谷に向かって南面した、標高720～730mの緩斜面に立地する。

中寺は、地元での伝承とわずかな地名のみ残され、文献が殆どなく実態は永らく不明であった。そこで琴南町では町誌編纂事業に伴い、昭和56年に伝承地付近で詳細分布調査を実施した。その結果、礎石と思われる石塊を伴うテラス状遺構の存在を確認したことから、にわかに中寺伝承との関連が真憑性をもたらすため、町教委では、町誌編纂及び今後の遺構

の保存策に関する基礎資料を得るために、県教委との共催により、上記の日程で確認調査を実施した。

事前の踏査では、尾根上で南向き斜面にかけての削平地と、やや下方の斜面に3箇所の小規模なテラス状削平地(上方から第1～第4テラスと仮称)があり、うち第2・第3テラスで礎石の一部が露出していることを確認した。そこで今回の調査は、当該地がさしあたり開発の影響を受けないことと、限られた調査期間という状況を踏まえ、第3テラスにおける礎石群の性格及び遺存状況を確認するためのトレンチ調査に絞って実施した。

第3テラスは、標高723m前後の南面する70m程度の削平地である。その南縁辺に3個の礎石が東西方向に1列に側面まで露出していた。これらを元に、腐葉土の除去と探査棒により、柱間距離1.8mの3間四方、12個の礎石を検出し、更に中心に心礎を検出するに至り、塔跡と推定した。主軸はほぼ正確に南北にとっている。

南西端の礎石は整地面の崩壊のためか欠落し、その北隣も根固め石が1個露出しているだけである。また、北西から南東への対角線上の礎石2個を欠く。探査棒でも確認できず、後世抜き取られたか、当初から裾えられていなかったのか、検討の余地がある。

石材は安山岩と思われ、いずれもいびつな形状で、約40～60cm四方を測る。心礎ほか2～3の石は加工が認められるが、大半は板状の自然石である。

心礎は68×62cmを測る。上面は平坦で、中心に孔をもたない。

心礎東側で南北のトレンチを掘り下げ中、心礎横で須恵器壺を埋設した配石遺構を検出したこ



中寺廃寺位置図 (1/50,000)

とが端緒となって、心礎下部から地鎮・鎮壇具と推察される遺物を伴う土坑を検出した。心礎直下の土坑は、バラス状の小砾をまばらに敷いた直径90cm、深さ約25cmの不整円形を呈している。中央に土師器の甕、その北側と西側に須恵器壺を配置し、心礎中心主軸上の土坑南縁辺で土師器壺を埋えていた。更に土坑両側には、直径15cm程度の石を内径20~25cmの円形に配置した遺構を検出した。東側の配石遺構下からは前記と同形の壺が出土したが、西側の配石下では浅い落込みを検出したのみで、遺物は出土しなかった。

他のテラス状遺構の状況は、第1テラスでは礎石が確認できず、第2テラスでは露出している礎石、埋没している礎石等、柱間距離2.3mの2間四方の礎石建物遺構を確認した。第4テラスでは礎石は確認できなかったが、下方に4個ほど礎石と思われる平坦面をもつ石材が流れ落ちていることから、建物遺構が存在するものと思われる。

第1図に示した実測図は、1~10が第3テラスからの出土、11が第1テラスでの表採である。うち1~7が心礎下の地鎮・鎮壇具と考えられる遺物である。6の土師器甕の北側に1・2の須恵器壺、西側に3・4、東の配石下に5が配置されていた。また、7の土師器壺が甕の真南に置かれていたものである。8~10はトレンチから出土した。8は土師質の皿、9は須恵器壺、10は須恵器鉢である。他に鉄釘7点、黒色土器細片が出土している。

以上のうち塔の建立年代に関する1~7は、類例は少ないものの10世紀前半と考えられる。
中寺庵寺は、寛政11(1799)年に書かれた『讀岐廻遊記』^(註)にのみ寺名が見られ、他は地元の伝承と当該地の「中寺」という字名だけが残されている。

今回の調査は、塔跡と推定できる礎石建物を伴うテラス状遺構を含む4箇所の削平地を確認し、心礎下から地鎮・鎮壇具と推察される遺物の出土をみた。この資料から中寺庵寺、少なくとも塔跡については、10世紀前半に建立され、『讀岐廻遊記』の記載に依るならば18世紀末にはすでに伝承のみ、という状況になっていたことが窺われる。今後は、他のテラス状遺構の性格、更には伽藍配置や創建年代、地鎮・鎮壇具の問題など検討すべき課題を多く残している。

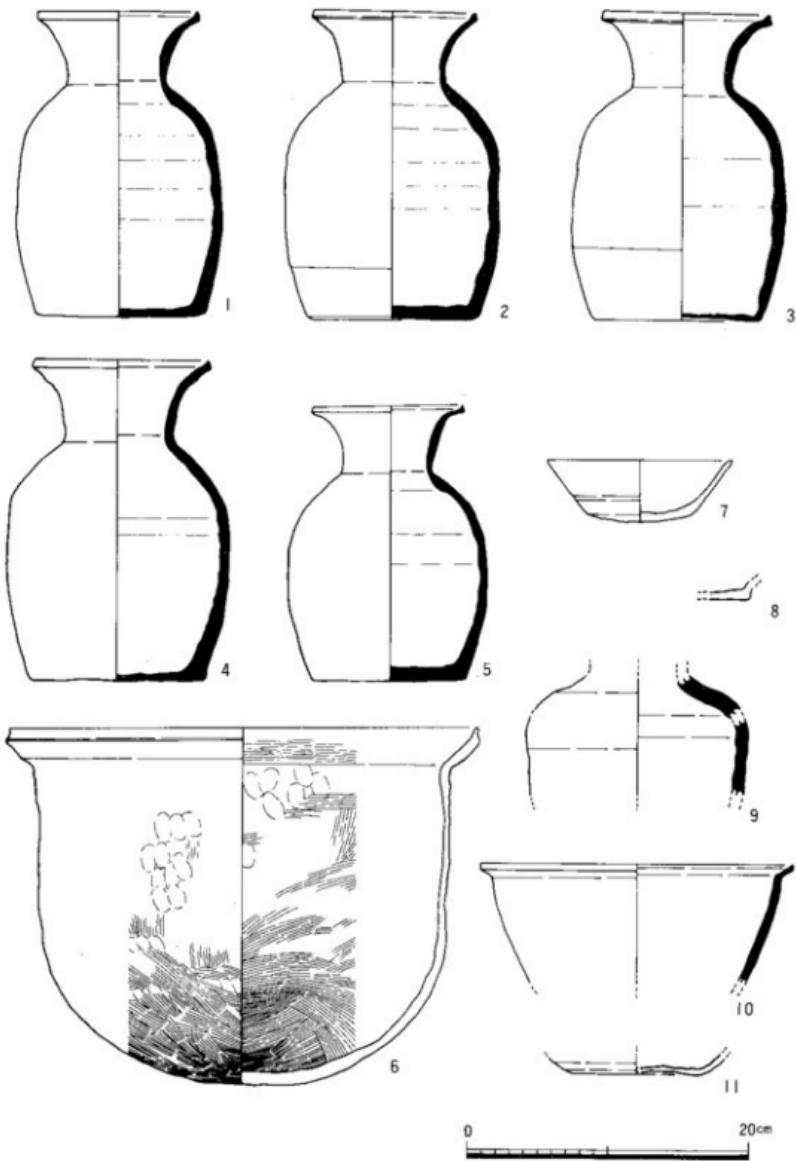
本県における山岳寺院の発掘調査は、隣接する仲南町尾ノ背庵寺で実施されたのみで、全国的にみても調査例が増加しつつあるが、まだ多いとはいえない。またその大半が中世寺院であり、平安中期にまで遡ると思われる山岳寺院の調査例は極めて少ない。今後の全国レベルでの研究の進展に期待したい。

なお、詳しくは琴南町教育委員会刊『備中地遺跡発掘調査報告書』に調査概報を付載しているので参照されたい。

註 進藤政量 『讀岐廻遊記』寛政11(1799)年に、

中寺 替し此中寺に行法不思議の住僧有。飛鉢の法を行ひ、香西の沖へ鐵鉢を浮、中寺にて行ひけるに、遙船と見掛此鉢追懸米を乞。鉢に米滿るや否や、其鉢則空中に飛上り、中寺に飛歸りけると也。米を入れされは、彼鐵鉢より火炎燃出、遙船を追かけしと也。依て今俗説に負め催足の怨なるを、火はち付と言習せなり。

と記載されている。(『香川叢書』第3巻所収、1943年刊)



第1図 中寺庵寺出土土器実測図



第2図 塔跡礎石群（中央が心礎）北西から



第3図 心礎下鎮壇具検出状況（北から）

南草木遺跡

所在地 三豊郡仁尾町大字仁尾字南草木乙431-1 調査期間 昭和59年7月13日～7月25日

南草木遺跡は、七宝山系に囲まれた仁尾町の、標高12mの舌状低丘陵上に立地する。有名な縄文時代前期の貝塚はこの丘陵の南斜面に位置するが、現在は蜜柑樹園となっており、旧地形を留めていないため、部分的には貝殻の散布を認めることができるもの、貝層を観察することはできない。

南草木遺跡は、昭和13年に「史前学雑誌」に樋口清之氏が「香川県仁尾町南草木貝塚の研究」と題して発表した、前年の試掘調査の成果により、全国に知られるようになった。

その後昭和50年1～2月、香川県教育委員会は重要遺跡確認調査の一環として本遺跡の発掘調査を行い、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居址1棟及び縄文時代のピットを検出し、後日県史跡に指定した。

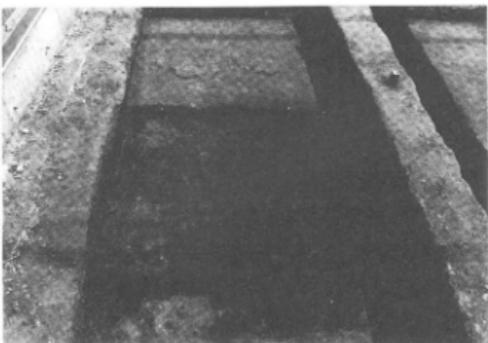
今回の発掘調査は、先の調査地点から20～30mほど東の史跡指定地内で農業用倉庫建設に伴う現状変更許可申請が出されたことから、県教育委員会と町教育委員会の共催により、上記の日程で実施した。調査は建築中の倉庫内40m²を対象とし、30m²を発掘した。

検出した遺構は、包含層を除去した地表下20cm以下のレベルで4箇所の焼土面と、さらに5cm以下のレベルで東西にのびる幅、深さともに5cm程度の溝を2mにわたって検出した。竪穴住居址の一部分である可能性もあり、精査したが確証は得られなかった。

遺物は包含層と遺構面直上から28ℓ入コンテナ1箱分出土した。表土層にはわずかに縄文土器・須恵器の細片が混入しているが、他は殆ど弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器である。第2図に主なものを紹介



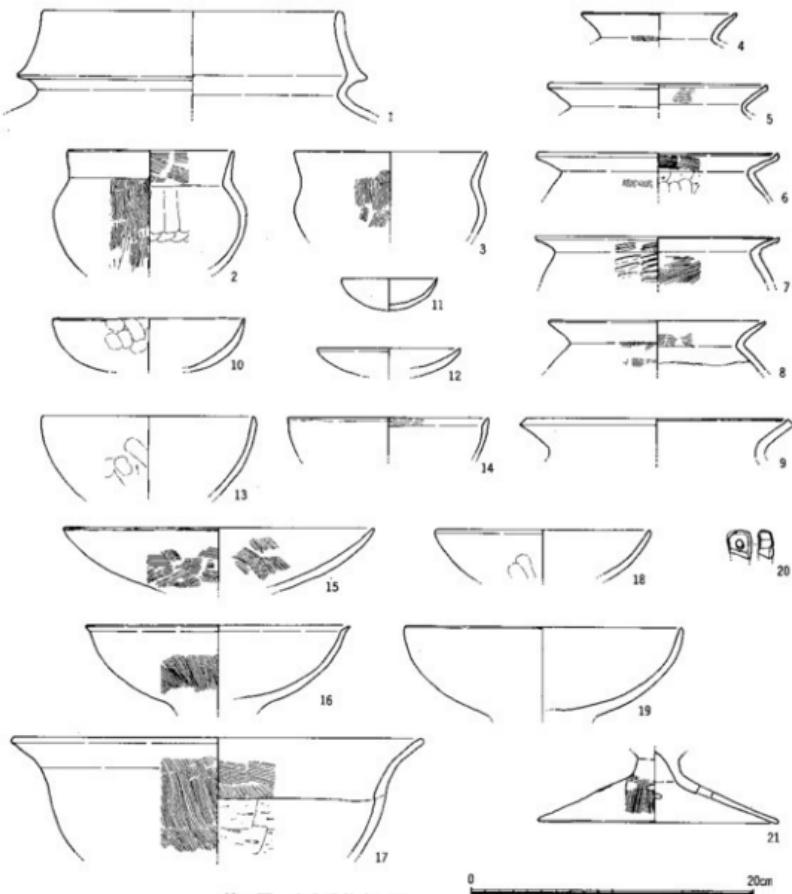
南草木遺跡位置図



第1図 検出遺構（南から）

した。壺と鉢が多い。1は二重口縁をもつ壺である。他地方からの搬入品であろうか。20は棒状有孔土錐の端部である。21は4方向に穿孔した高壺の脚である。

今回の調査地は昭和49年度調査地点の東に近接しているが、発掘面積が狭く、検出遺構が堅穴住居址の一部である可能性をもちながらも確証を得られず、前回検出した住居址との関連を面としてとらえるまでには至らなかった。しかし、出土遺物はほぼ同時期と考えられるため、弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構が丘陵上に広がりをもって存在する可能性が高くなかったことは、今回の調査の一つの成果といえよう。



第2図 出土遺物実測図

竹田遺跡

所在地 三豊郡豊中町大字笠田竹田1054番地

調査期間 昭和59年6月7日～7月3日

竹田遺跡は、西の七宝山塊と東の眉山～鳥越山塊にはさまれた、三豊平野北西部の標高15mほどの微高地上に立地している。

当遺跡は、四国横断自動車道関連県補助竹田地区圃場整備事業の工事中、昭和59年2月22日に須恵器が出土したことにより発見された。

発掘調査は、香川県教育委員会と豊中町教育委員会の共催により、上記の日程で実施した。

調査区は2段の水田を均一に削平した1,520m²の区画で、畦畔工事も1辺を除いてほぼ終了し、耕作土が一箇所に集積されている状態

そのため、土層序は不明である。調査開始時、既に灰黄色粘質土（地山？）上面に遺構の一部が露出していた。なお、本来の上手である東半分は、削平が更に下層の乳灰色粘土にまで達していた。

主な検出遺構は、大小約170のピット群、備前焼大甕の埋設土坑などである。

ピット群は概ね北北東から南南西の方向に延びており、調査区北端では西方向にも広がる。前者の広がりは旧水田の畦畔の位置に近く、センターに平行している。その大半は直径10～15cm程度で、斜めに掘り込まれたものが多い。西に広がるピット群（第3図）は直径40～50cmのものが多く、根石をもつ柱穴も2穴検出した。対応して建物を構成する他の柱穴は北へ延びる状況を呈しているが、農道や水路工事が進行しており、規模は確認できなかった。また、調査区北東寄りにも掘立柱建物を1棟検出したが、削平のため柱穴は浅く、欠けているものが多い。

調査区南東寄りでは、体部の径が75cmほどの備前焼大甕を埋設した土坑（第4図）を検出した。検出面では40×50cmの石塊が置かれており、その重量のため体部が最大径部分で、下半分の外にずれ落ちていた。また、底部は穿孔された状況で、やはり人為的に打ち欠かれたと思われる口縁部・頸部の破片及び土師質土器片・木材片などと共に体部内の粘質土の底に堆積していた。遺構の性格は不明であるが、墓と考えるのが適当であろう。類例を待ちたい。

当遺跡の出土遺物は、上記の大甕を除くと28ℓ入コンテナ1箱分程度であった。ピット内の遺物は固化的困難な土師質土器細片が多く、量的には調査開始時の採集土器が大半を占める。古墳時代後期から奈良時代の須恵器、土師器、中世の土師質土器、青磁、白磁、備前焼、北宋銭（元



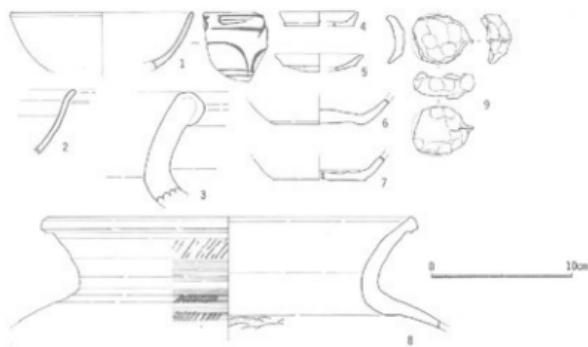
竹田遺跡位置図

祐通宝）などがある。

第2図1は雷文帯をもつ青磁碗である。15世紀代の龍泉窯系と思われる。2は12~13世紀の白磁碗である。3は備前焼の壺である。備前焼編年の第III期に比定できる。4~7は土師質小皿である。4・5は底部ヘラ切り、6・7は糸切り痕を残す。8は須恵器壺である。7世紀前半のものと思われる。9は手捏による舟形土製品と思われる。現存全長4.4cm、幅3.6cmを測る。船首部分から船底にさしかかる部分にかけて指でつまみ出し、竜骨を意識したような作りになっている。船体は指頭で左右につまみ出して成形している。橙褐色を呈し、極めてもろい。もう一方の端部を欠いているが、全長は5cm余りであろう。第1図に示した地点から出土した。削平されていて遺構の形状は不明であるが、炭化物と焼土粒の集中している中から出土したことから、何らかの祭祀的な行為の痕跡であろうか。他に手捏土製品の破片2点、須恵器の壺もしくは壺の体部細片と共に出土しているが、年代は明らかにし得ない。舟形土製品を出土する他の遺跡の例から判断して、あるいは古墳時代後期に属するかもしれない。

また、今回図化していないが、先述の備前焼大壺は、第IV期に編年される。

以上の結果から、竹田遺跡は7世紀を中心とする時期及び中世の複合遺跡と考えられる。検出遺構は殆んど中世のものと思われるが、集落であるとすれば、中心から外れた地点であろう。周辺一帯から白陶・土師質土器片が採集できることから、当該調査区の立地する微高地全域に遺跡が広がるものと予想される。



第2図 出土遺物実測図



第3図 調査区北端のビット群（西から）



第4図 備前焼埋壺（西から）

川東古墳

所在地 大川郡大川町富田中川東

調査期間 昭和59年3月21日～3月28日

川東古墳は長尾平野の東限を画する火山より南に派生する尾根先端付近の頂部に立地する。古墳からは南西方向に平野部を見渡せるが、北方は火山などの山塊に遮られるため瀬戸内海への展望はほとんど利かない。

東讃地域においては、津田町鶴の部山古墳とともに稀少な積石塚であるが、その基礎資料は未収集であった。そこで、県教育委員会では昭和58年度の重要遺跡確認調査の一環として、本墳の地形測量調査を実施することにした。

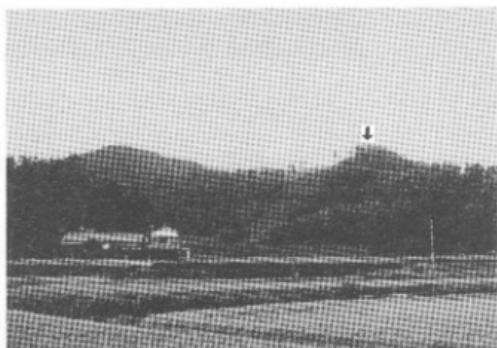
測量結果によれば、後円部については128.25mを、前方部先端については128.5m付近を墳

丘基底部に想定し、全長は約39mとすることができよう。後円部は径20～22m、高さ約3mをはかる。前方部は、東側でバチ形に開く形状を見せており、端部の幅は約13mをはかる。後円部中央に、 2×2.5 mほどの盗掘坑があり堅穴式石室と推定されるが、その形状についての情報は得られなかった。

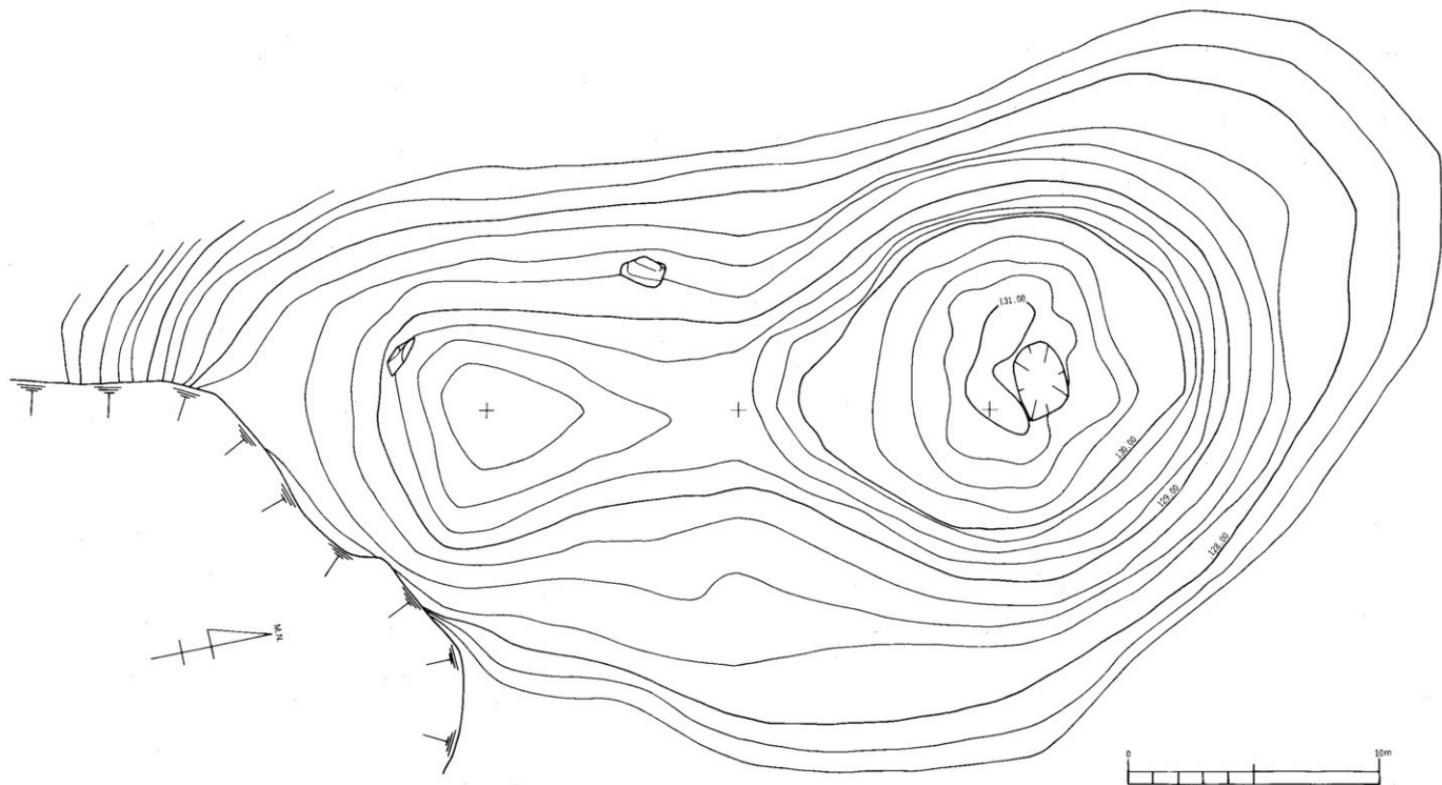
川東古墳はその墳丘からみて前期でも古い段階に位置づけられる可能性があり、寒川町奥3号墳とともに東讃地域の古墳文化成立を考える上で貴重な古墳と考えられる。



川東古墳位置図



第1図 川東古墳遠景



第2図 川東古墳墳丘測量図

昭和60年度

昭和60年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況	32
(1) 聖通寺城跡	36
(2) 下川津遺跡	37
(3) 高松城東ノ丸跡	39
(4) 古田3号塚	41
(5) 縁塚古墳群	44



遺跡位置図

60年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	名 称	遺 踪			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
1	聖通寺城跡	坂出市御供所町	城 蹤	室 町 時 代	瀬戸大橋架橋に伴う事前調査
2	下川津遺跡	〃 川津町	集落跡	弥生時代 ～室町時代	〃
3	永井遺跡	善通寺市下吉田町・中村町	〃	縄文時代 ～江戸時代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査
4	乾遺跡	〃 中村町乾	〃	鎌倉時代 ～江戸時代	〃
5	上一坊遺跡	〃 吉原町上一坊	〃	弥生 時 代	〃
6	矢ノ塚遺跡	〃 〃 矢ノ塚	〃	弥生時代 ～室町時代	〃
7	西碑殿遺跡	〃 碑殿町三反畑	〃	弥 生 時 代	〃
8	北条遺跡	三豊郡高瀬町上高瀬 北条	散布地	〃	〃
9	利生寺遺跡	砂古 〃 上勝間	集落跡	弥生時代 ～江戸時代	〃
10	大門遺跡	〃 〃 〃	〃	古墳時代 ・室町時代	〃
11	利生寺古墳	〃 〃 〃	古 墳	古 墳 時 代	〃
12	矢ノ岡遺跡	矢ノ岡 〃 〃	集落跡	古墳時代 ・室町時代	〃
13	延命遺跡八反地地区	〃 豊中町上高野 八反地	〃	弥生時代 ～鎌倉時代	〃
14	一の谷遺跡群	観音寺市本大町・ 吉川町	〃	弥生時代 ～江戸時代	〃
15	石田遺跡	〃 池之尻町石田	〃	古墳時代 ～鎌倉時代	〃
16	長砂古遺跡	〃 〃 大長	〃	弥生時代 ～平安時代	〃
17	高松城米蔵丸跡	高松市玉藻町102-3	城 蹤	室町時代 ・江戸時代	県民ホール建設に伴う確認調査
18	〃	〃	〃	室町時代 ～江戸時代	住宅建設
19	醍醐3号墳	坂出市西庄町醍醐	古 墳	古 墳 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
20	聖通寺城跡	綾歌郡宇多津町	城 蹤	室 町 時 代	テレビ中継局建設に伴う事前調査
21	〃	〃	〃	〃	送電線建設に伴う事前調査
22	三井遺跡	仲多度郡多度津町大字 三井字越ノ口	集落跡	弥 生 時 代	県道拡幅に伴う事前調査
23	利生寺遺跡	三豊郡高瀬町上勝間 利生寺	〃	弥生時代 ～江戸時代	圃場整備に伴う事前調査
24	東円坊遺跡	大川郡白鳥町東山字東 円坊	五輪塔	室 町 時 代	圃場整備に伴う事前調査
25	奥14号墳	大川郡寒川町神前字奥 〃 津田町字南北比与田	古 墳	古 墓 時 代	観光開発に伴う事前調査
26	椋の木古墳	大川郡長尾町西2515-1	〃	〃	史跡整備に伴う確認調査

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
本四公団	1,300	県教委	本四公団	発掘調査	57条の3	大山, 安藤, 藤田 松原, 坂口, 岩崎	60.4.10~ 60.5.8
〃	28,600	〃	〃	〃	〃	大山, 松本, 藤好, 西村 藤田, 川田, 安藤, 和泉 松野, 松原, 也口	60.5.1~ 60.3.31
道路公団	15,600	〃	道路公団	〃	〃	廣瀬, 渡部, 薦田 三好, 藤田, 今井	60.5.7~ 60.3.31
〃	2,100	〃	〃	〃	〃	薦田, 今井	60.9.2~ 60.11.20
〃	2,200	〃	〃	〃	〃	〃	60.11.13~ 61.1.24
〃	7,000	〃	〃	〃	〃	藤好, 薦田, 今井	60.4.1~ 60.8.30
〃	1,400	〃	〃	〃	〃	廣瀬, 三好, 藤田	60.4.1~ 60.4.30
〃	100	〃	〃	〃	〃	野中, 株木	60.5.9
〃	3,200	〃	〃	〃	〃	〃	60.5.22~ 60.7.18
〃	5,500	〃	〃	〃	〃	〃	60.7.22~ 60.1.28
〃	700	〃	〃	〃	〃	〃	60.12.2~ 60.3.17
〃	2,600	〃	〃	〃	〃	〃	60.1.28~ 61.2.27
〃	2,000	〃	〃	〃	〃	岸上, 西岡, 田淵	60.4.1~ 60.5.15
〃	17,600	〃	〃	〃	〃	〃	60.5.15~ 61.3.31
〃	16,000	〃	〃	〃	〃	小西, 片桐, 磯崎	60.5.1~ 61.1.11
〃	2,500	〃	〃	〃	〃	〃	61.1.13~ 61.3.31
県	6,000	〃	県	〃	98条の2	池内, 真鍋, 中西	60.4.15~ 61.3.31
河辺建設	269	〃		立会調査	57条の2	池内	60.4.22
県	1,000	〃	国・県	発掘調査	98条の2	廣瀬, 中西 斎藤(歴民)	61.2.3~ 61.3.31
西日本放送	60	〃	西日本放送	〃	57条の2	池内	61.2.24~ 61.2.25
四国電力	60	〃		立会調査	〃	〃	61.2.25
県	60	〃		立会調査	57条の3	真鍋	60.10.31
〃	120	〃		立会調査後 工法変更	98条の2	野中	61.2.12
白鳥町	200	町教委	白鳥町	発掘調査	57条の3	町教委職員 発掘指導 中西, 六車	60.10.16~ 61.1.16
大川中部開発組合	1,436	寒川町教委	大川町 寒川町 津田町	〃	57条の2	香川大学	~60.12.28
長尾町	150	町教委	長尾町	〃	98条の2	〃	60.4.3~ 60.4.30

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
27	打越古墳	大川郡長尾町西2614	古 墓	古 墓 時 代	遊歩道建設
28	長崎遺跡	小豆郡池田町大字二面 字長崎2320-1番地	包蔵地	弥 生 時 代	果樹園造成
29	池谷窯跡	香川郡香南町大字由佐 3411番地 1	窯 跡		土砂崩れ
30	古田 3 号塚	〃 〃 池内字中 筋183-1	塚	室 町 時 代	圃場整備に伴う確認調査
31	下司廃寺	高松市東植田町下司	寺院跡	奈 良 時 代	水路改修に伴う事前調査
32	かしが谷古墳	高松市鬼無町佐料	古 墓	古 墓 時 代	農道建設に伴う確認調査
33	白山神社古墳	高松市木太町1479	〃	〃	社殿建設に伴う確認調査
34	紺屋町遺跡	高松市紺屋町	集落跡	江 戸 時 代	市立美術館建設に伴う事前調査
35	淨願寺山10号墳	高松市飯田町1414	古 墓	古 墓 時 代	学術調査
36	下川津古墳群	坂出市川津町・富士見町	〃	〃	市道建設に伴う事前調査
37	下川津遺跡	坂出市川津町	集落跡	弥 生 時 代 ～室 町 時 代	〃
38	地神山古墳群	綾歌郡綾歌町富熊 奥川内	古 墓	古 墓 時 代	宅地造成に伴う事前調査
39	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺町国分 字上所	寺院跡	奈 良 時 代	史跡整備に伴う確認調査
40	矢ノ塚遺跡	善通寺市吉原町	集落跡	弥 生 時 代 ～室 町 時 代	農地整備に伴う事前調査
41	仙遊遺跡	善通寺市仙遊町	墳 墓	弥 生 時 代	住宅建築に伴う事前調査
42	永井遺跡	善通寺市中村町宮東 182他	集落跡	繩 文 時 代 ～江 戸 時 代	圃場整備に伴う事前調査
43	転石古墳	仲多度郡多度津町大字 青木字転石	古 墓	古 墓 時 代	開発整備に伴う確認調査
44	備中地遺跡	仲多度郡琴南町造田	集落跡	弥 生 時 代	県道拡幅に伴う事前調査
45	船越遺跡	三豊郡詫間町大浜船越	包蔵地	繩 文 時 代 ～古 墓 時 代	圃場整備に伴う事前調査
46	宮脇遺跡	三豊郡豊中町大字笠田 笠岡	集落跡	鎌 倉 時 代	〃
47	向井西の岡遺跡	観音寺市中田井町・ 新田町	〃	弥 生 時 代 ・古 墓 時 代	〃
48	榎木遺跡	観音寺市古川町579番地	溝状遺構	古 墓 時 代	水路改修に伴う事前調査
49	納経塚古墳	観音寺市池之尻町字山 越1101-2	古 墓	〃	開発整備に伴う事前調査
50	下所遺跡	観音寺市古川町757番地	溝状遺構	弥 生 時 代	圃場整備に伴う事前調査
51	縁塚古墳群	三豊郡大野原町大字 丸井	古 墓	古 墓 時 代	土砂採取の伴う事前調査

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
長尾町				現状保存	57条の6		発見日 59.12.1
個人				〃	〃		発見日 60.11.5
				〃	〃		発見日 60.11.16
香南町	75	町教委	香南町	発掘調査	98条の2	町教委職員 発掘指導 中西	60.12.5～ 60.12.23
高松市東植田 土地改良区	10	市教委	高松市	立会調査	57条の3	市教委職員	61.1.14
県	400	〃	県	発掘調査	98条の2	〃	60.6.1～ 60.9.27
個人	20	〃	高松市	〃	〃	〃	60.7.15～ 60.7.27
高松市	100	〃	〃	〃	57条の3	〃	60.10.28～ 60.11.22
香川大学	60	香川大学	香川大学	〃	57条	香川大学	60.8.20～ 60.8.28
坂出市	50	市教委	坂出市	〃	57条の3	県文化財保護協 会 坂出支部	60.9.9～ 60.9.20
〃	100	〃	〃	〃	〃	〃	60.1.31～ 61.3.10
星和地所	2,000	調査団	星和地所,町	〃	57条の2	町教委職員 奈良大学	60.7.18～ 61.8.31
国分寺町	1,050	〃	国,黒,国分寺町	〃	98条の2	町教委職員	60.6.1～ 60.12.20
個人	265	市教委	普通寺市	〃	57条の2	市教委職員	60.5.28～ 60.6.10
〃	135	〃	〃	〃	〃	〃	60.7.15～ 60.7.25
普通寺市中村 土地改良区	80	〃	〃	立会調査	〃	〃	60.12.1～ 60.12.2
多度津町	200	町教委	多度津町	発掘調査	57条の3	町職員	60.5.13～ 60.6.8
県	150	〃	県	〃	57条の3	町教委職員 発掘調査 中西	60.11.18～ 60.11.19
詫問町	30	〃	詫問町	〃	57条の3	町教委職員 発掘指導 中西	60.11.27～ 60.11.29
豊中町	1,500	〃	豊中町	〃	〃	町教委職員	60.11.26～ 61.2.17
一の谷池 土地改良区	591	調査団	一の谷池 土地改良区	〃	57条の2	調査団 団長 土井正夫	60.7.22～ 60.8.7
観音寺市	130	市教委	観音寺市	〃	57条の3	市教委職員	60.12.20～ 60.12.24
合田不動産	28	〃	〃	〃	57条の2	〃	60.8.19
一の谷池 土地改良区	400	〃	一の谷池 土地改良区	〃	〃	〃	60.10.1～ 60.10.8
大野原町	1,000	町教委	大野原町	〃	57条の3	町教委職員 発掘指導 中西	60.8.5～ 60.11.3

聖通寺城跡

所在地 坂出市御供所町

調査期間 昭和60年4月10日～5月8日

聖通寺山は坂出市と宇多津町にまたがり、標高116mの北峰を最高所として南へ中峰・南峰の3峰が連なる南北に長い独立丘陵で、中世山城が立地することで知られる。瀬戸大橋から南へ延びる国道30号線の建設に伴い、聖通寺山の東側の斜面部で、道路建設予定の標高31～57mの間の各尾根筋で、比較的傾斜の緩やかな箇所に、4本のトレンチを設定して調査を実施した。

発掘調査の結果、聖通寺城跡にかかわる明確な遺構は検出できなかったものの、聖通寺城跡と関係を有すると考えられる遺物が出土した。

調査で出土した遺物は、中世から近世にかけてのもので、土師質の椀・皿・蛸壺、青磁椀、備前焼きの壺、土鍾、開元通寶・寛永通寶などである。

参考文献

香川県教育委員会「N 聖通寺城跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（VII）」1986・3



聖通寺城跡調査区位置図



第1図 第4・8トレンチ周辺地形

下川津遺跡

所在地 坂出市川津町 調査期間 昭和60年5月1日～61年3月31日

本調査は、瀬戸大橋から南に延びる国道30号線と国道11号線が交わる坂出南インターチェンジ建設に伴って実施したものである。調査対象地は、大東川東岸の標高5m前後の微高地と埋没河川部の低地からなる。調査に先立ち、昭和59年度に工事予定面積の約1%に相当する1,850m²の予備調査を実施し、昭和60年5月から本認査を開始した。調査対象面積は89,600m²である。今年度は、国道11号線に隣接する地区と調査対象地の東側の縁辺部市道及び水路の付け替え予定地区を主として調査し、実掘面積は28,600m²である。

国道11号線の北側では、微高地上に、弥生時代の後期後半から古墳時代前期及び、古墳時代後期の2時期に別れる竪穴住居群を中心とした遺構を検出した。この地区での検出した竪穴住居は前者が11棟、後者が10棟である。竪穴住居は円形のものと隅丸方形のものがあり、前者の方が大形である傾向が見られる。出土遺物からは、両者に明確な時期差は認められない。この時期の住居群には消失家屋が多い。竪穴住居から土器・石器のほか、板状鉄斧や小型仿製鏡などの金属器が出土している。古墳時代後期の竪穴住居は、方形プランを呈し、備え付けの窓をもつものが多い。

竪穴住居群が広がる微高地の東側の縁辺には、埋没河川のひとつSR03が流れ、その中の古墳時代後期以降の流路の最下層から、7世紀を中心とする遺物と共に大量の木器が出土した。木器には農具・工具・曲物・楽器・建築部材などがある。ヤブツバキの一木で作り出したカラスキなど農具は量質ともに注目すべき遺物が多い。また楽器として琴柱などが出土しており注目される。

11号線の南部の調査対象地の東および南側の縁辺部では、SR03の続きの部分と古墳時代後期以後の竪穴住居および堀立柱建物群を検出した。また同じ11号線の南部の西側では、埋没河川内から平安時代後期と考えられる水田跡を検出した。



下川津遺跡位置図

参考文献

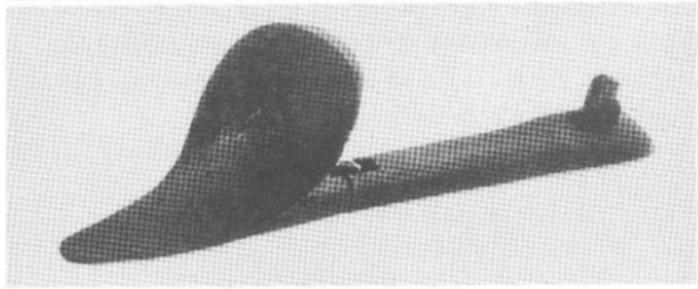
香川県教育委員会「II 下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(VII)』1986・3



第1図 国道11号線
周辺の調査区（北から）



第2図 竪穴住居
(弥生時代後期)



第3図 カラスキ

高松城東ノ丸跡

所在地 高松市玉藻町85番地

調査期間 昭和60年4月15日～61年5月31日

1. はじめに

高松城東ノ丸は、寛永十九年（1642）に入封した松平頼重によって、生駒親正が築城した高松城の改修の一環として寛文十一年（1672）から延宝五年（1677）にかけて造成された。

幕末の絵図によれば、東ノ丸の北半分（調査地点）は米蔵倉庫が在ったことになっており今回の調査もこれを主目的に実施した。

2. 主な遺構

検出した遺構は、4時期に区分される。

1期（15世紀代） 生駒氏の高松城築城以前で、漁民の墓（火葬墓）が見られる。火葬墓は石組ができており、密集していた。



高松城東ノ丸跡位置図

2期（17世紀前半～中頃） 東ノ丸が造成される以前で、海岸線に沿った護岸用の石垣（下層石垣）と礎石建物跡などが見られる。下層石垣は、短い間に4回にわたって改修が行われている。この改修は、護岸を北に張り出し埋立地を拡幅する目的であったと推定される。これらの遺構は、東ノ丸の造成によって埋没した。

3期（17世紀後半ごろ） 東ノ丸に伴う施設として、東門堀跡や石組の溝がある。東門堀跡は、外部から域内が見渡せないようにする目隠し堀で、堀の基礎である石組だけが検出されている。今回の調査では堀の先端のみ検出され、全体は市道等の下に埋没したままである。

4期（19世紀後半） 磚石の倉庫が5棟、建物跡が2棟、上水道施設である木製樋管が見られる。倉庫跡はその配置が幕末の絵図にあわず、規模も小さくなっていることから、この時期に造り直したと考えられる。これらの建物は、第2次世界大戦で焼失した。木製樋管は、杉材を箱状に組みたて、南から北へ徐々に深く埋めてその勾配で水を送っている。配管の分歧点には井戸を作り、水を汲み出していたことが伺われる。

3. 遺物

遺物の多くは、瓦と染め付け磁器・陶器である。磁器は、江戸時代の前半では肥前（現在の佐賀県）のものが多く、その後瀬戸・美濃のものが入る。陶器は、備前焼きも見られ商品流通のようすもわかってきた。近世遺物は、あまり調査例がないことから不明な点も多くのこるが、江戸時代を考えるうえで貴重な資料になった。詳細は、報告書によられたい。



第1図 調査区垂直写真（下層石垣）

古田3号塚

所在地 香川郡香南町池内字中筋183-1

調査期間 昭和60年12月5日～12月23日

(1) 位置と環境

古田3号塚は、高松平野南部、小田池の南西約400mの低丘陵上北西向き緩斜面に立地する。周辺では遺跡の所在はあまり知られておらず、300m及び400m南東の県道千疋・高松線の両側に古田1号塚・同2号塚が所在した（共に調査後消滅）ほか、前記の小田池西岸の丘陵上がサヌカイト片、須恵器、陶磁器等の散布する小田池西遺跡がある程度である。ただ、古田3号塚から1km東からは、条里遺構が広がっており、平野部縁辺の低丘陵上に立地する本遺跡付近にも、今後新たな遺跡が発見される可能性はある。



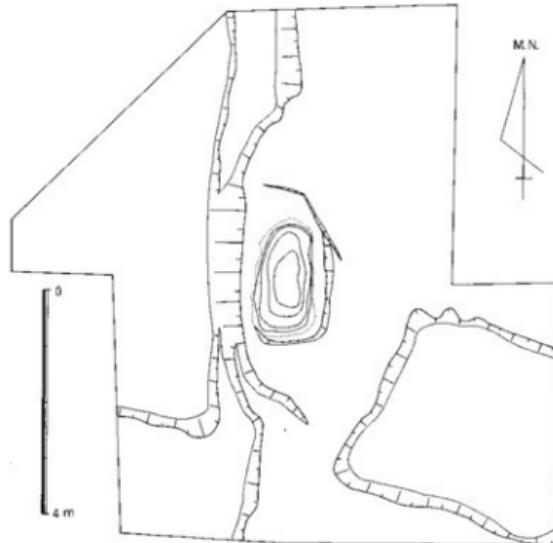
古田3号塚位置図

(2) 調査の経過

古田3号塚の発掘調査は、当該地が団体営圃場整備事業（池内地区）の実施にあたり、現状保存が困難であることから、59年度の2号塚に引き続き、香南町教育委員会が調査主体となり、記録保存を目的として実施するに至った。県教育委員会は職員を派遣してその指導にあたった。調査は上記の日程で実働8日間を費して行った。

(3) 遺構について

調査対象面積は、3号塚の所在する水田1,248m²であるが、工事が当該地での掘削を



第1図 調査区全体図

あまり伴わないことから
塚本体とその周囲75m²に
ついて発掘を行った。

3号塚は、地元住民の
話によると、古くはかな
り大きかったということ
であるが、耕作によって
次第にマウンドが削られ
調査前には南北2m、東
西1mの長円形を呈し、
高さは25cmを測る。表面
には大小の石塊及び小礫
が散乱していた。

塚の表土からは、須恵

器片、土鍋脚部、染付椀破片などが疊に混じって出土し、周囲の耕作中の不要物を集積したよう
な状態であった。

表土除去後の塚の規模は、南北2m、東西1mと主軸を南北にとり、高さ15cmを測る。

埋葬施設は検出されなかった。

一方、発掘区南東隅において、3.5m×4mのいびつな長方形を呈する浅い落ち込み(深さ10~15
cm)を検出した。濃灰褐色を呈する埋土から土師質土器の細片が、発掘区としては比較的多く出
土した。

他に、塚から西では段落ちが認められるが、近世以降の水田耕作に伴う地形の変換点と思われる。

(4) 遺物について

総量で28ℓ入コンテナ1箱弱の遺物が出土した。図化した1~7はすべて土師器である。

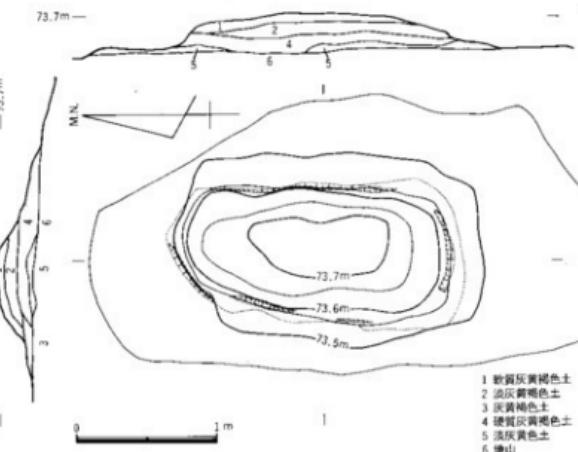
1・2はマウンド盛土から出土した羽釜の脚部である。1の基部には細かいハケ調整が認めら
れる。

3~7は発掘区南東隅の方形の落ち込みから出土した。3~5は小皿である。4・5の底面は
ナデ仕上げである。6は表裏面ともに炭素を吸着させたように灰黒色を呈する。7は灰色を呈し、
焼成から見ると須恵器系土器かもしれない。

以上はいずれも中世の所産と考えられる。

(5) まとめ

古田3号塚は、現在までの耕作で次第に削り込まれたため、本来の規模は不明である。また、
塚に伴う内部施設も検出できなかった。

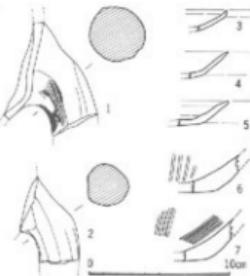


第2図 古田3号塚平・断面図

- 1 硬質灰黄褐色土
- 2 濃灰黃褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 硬質灰黃褐色土
- 5 濃灰黃褐色土
- 6 地山

発掘区全体を見ると、塚から西に向かって一段下がっているが、塚の周囲のみ丸みをもっており、マウンド東西セクションでも西端は端部を思わせるような状況を示していることから、本来の塚の規模を反映しているのかもしれない。

古田3号塚が、埋葬を伴う「墓」であるのか、それ以外の性格をもつのか、調査から確認することはできなかった。ただ、マウンドの中位土層から羽釜の脚部が出土していることから、本遺構は中世後半以降に作られたマウンドをもつ構築物の一部であろうと推察される。



第3図 出土遺物実測図



第4図 古田3号塚（表土除去後・東から）



第5図 調査区全景（北から）

縁塚古墳群(第1次調査)

所在地 三豊郡大野原町大字丸井

調査期間 昭和60年8月5日～11月3日

縁塚古墳群は、阿讃山脈中の雲辺寺山から北北西にのびる尾根の末端丘陵上に立地する。

当該地は蜜柑・柿などの果樹園であるが、四国横断自動車道建設用の採土と跡地利用の計画が立てられた。昭和60年1月中・下旬に、県教育委員会と町教育委員会が対象地内で詳細分布調査を実施し、昭和初期と終戦直後の開墾まで9基の古墳が所在していたことが、住民の情報や須恵器の散布などで判明した。その後、3月中旬に試掘調査を行い、その成果をもとに協議した結果、採土が最も急がれる地区について、県教育委員会の指導のもと、町教育委員会が調査主体となって、上記の日程で発掘調査を実施した。

検出した遺構は、古墳3基・弥生時代壺棺墓1基・土坑6基などである。

本調査区はかつて果樹園であったため、L字状に屈曲した尾根上は、墳丘をとどめず、ほぼ平坦に削平されており、主体部もまた3基とも破壊を受けていた。

5号墳は尾根の屈曲点を立地する。墳丘は削平されているが、主体部の東から南に廻る底の平坦な溝状遺構（周構あるいは墓道）から、本来は直径約15m程度の円墳であったと推察される。

主体部はN-42°-Wに主軸をとり、南西に開口する横穴式石室である。石材は根石を玄室に1石、羨道に3石残して抜き取られ、床面の玉砂利もやや乱れた状態で検出された。玉砂利の範囲や石材の掘り形などから推定して、玄室の長さ3.6m、幅1.8m、羨道の長さ2.3m、幅0.7～0.8mの規模をもつと推定される。

出土遺物は、須恵器2点（高杯・壺の蓋）、紡錘車1点、鉄鎌、馬具（轡・方形飾金具）、空玉、ガラス小玉などが出土した。須恵器が殆ど残っていないため、追葬の有無は不明であるが、おおむね6世紀後半としてよいだろう。

10号墳は尾根の先端に立地する。尾根を切断して周溝が廻る。直径16m程度の円墳と推定される。

主体部は主軸をN-7°-Wにとり、南に開口する横穴式石室である。破壊は石室上方のみで、最も良好に遺存していた。玄室は全長3.05m、最大幅2mで、平面プランはやや胴張り気味の羽



縁塚古墳群位置図
(●印調査地点)

子板状を呈する。羨道は長さ2.2m、幅0.85~0.95mを測り、羨道の南はJ字状の墓道がのびる。

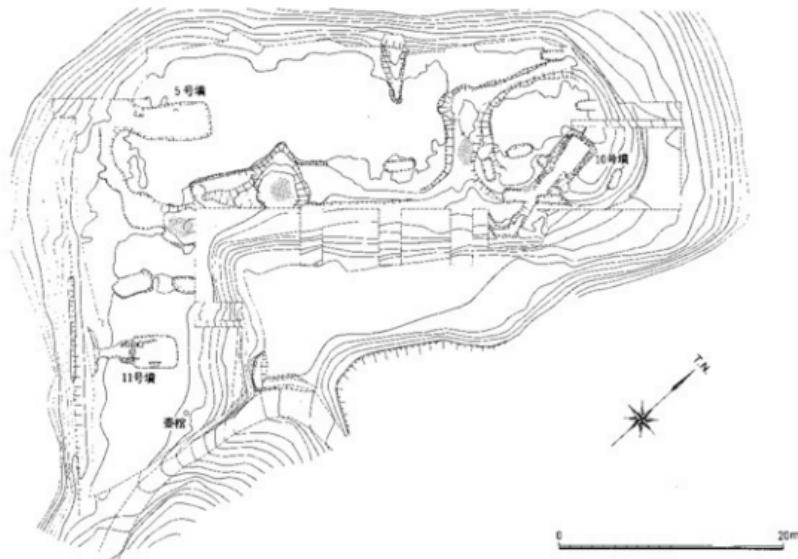
石室の上半分が削平されただけで盗掘を受けた形跡が見られないため、副葬品は多量に残されていた。玄室からは、須恵器（直口壺・長頸壺・平瓶・提瓶・甌等）、土師器（壇・坏）、紡錘車、鉄製品（斧・鎌・鐵・刀子）、馬具（辻金具・銚）、耳環、玉類（勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉）などが出土した。また羨道からは、須恵器坏蓋、紡錘車、鉄製鍔先が墓道からは坏（身・蓋）が出土した。現在整理中のため、追葬回数など検討の余地があるが、6世紀末~7世紀初頭と考えられる。

11号墳は尾根の基部に立地する。盛土は削平されているため、墳丘規模は不明であるが、前二者とほぼ同規模であろう。

N-42°-Eに主軸をとり、南西に開口する横穴式石室を主体部にもつ。羨道は3段ほど石材が残るが、玄室は側壁の根石などわずかに残る程度であった。玉砂利の範囲から推定した玄室の長さは2.5m、幅1.8mで胴張りをもつ。羨道は長さ1.9m、幅1m、墓道の長さは2.05mを測る。

出土遺物は、玄室床面から提瓶（大小）、坏（蓋・身）、切子玉、耳環、鉄鎌、鉄斧、鉄鎌のかく、珠文鏡と思われる小形鏡の鋏を中心とした破片が出土した。須恵器から6世紀後半の年代と考えられる。

以上が検出した古墳の概略である。他に5号墳の東側斜面では谷状の地形が見られ、土器溜を



第1図 緑塚古墳群遺構配置図 (アミ部分…土器溜り)

検出した。器台や装飾付壺など多量の須恵器が出土した。

また、10号墳墳丘の地山部分と周溝の外とで少なくとも6基の土坑を検出した。いずれも削平により遺物は殆ど出土していないため、年代は不明であるが、状況からおそらく古墳築造以前の集団墓地であったものと推察される。

本古墳群は從来の遺跡地図には収録されておらず、今回の開発に先立つての聞き取り調査を含めた詳細分布調査までは全く実態が把握できていなかった。しかし、分布調査により9基、第1次調査で新たに2基(10・11号墳)、また60年度2月から61年度にかけて実施された残りの地区的調査でも、聞き取り調査でつかみ得なかつた新たな古墳数基が、殆ど基底石程度の残存ではあるが確認された。工事対象外の土地を含めると、縁塚古墳群は20基近く存在するのではないだろうか。約2km北には県下でも有数の群集墳として知られる母神山古墳群が所在し、眼下の作田川扇状地には角塚古墳を始め3基の巨石墳が立地する。その中の縁塚古墳群の位置づけが今後検討課題となろう。

最後に、県下各地の市・町史に記載された小古墳群の多くが「開墾により消滅」という表現がなされているが、今回の調査のように墳丘は削平されても、なお遺構がかろうじて残存する可能性が高く、今後の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に際しては、この点に留意して実施するべきであろう。

なお、縁塚古墳群の詳細は、大野原町教育委員会から近日刊行予定の発掘調査報告書を参照していただきたい。



第2図 縁塚5号墳



第3図 縁塚10号墳



第4図 縁塚11号墳

昭和61年度

昭和61年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況	48
(1) 下川津遺跡	52
(2) 南谷遺跡	54
(3) ひきご塚古墳	58
(4) 横石島県道調査	59
(5) 本法寺西古墳	63
(6) 石塚山古墳群	64
(7) 備中地遺跡	65
(8) 旧練兵場遺跡	68
(9) 大原塚古墳	70
(10) 雲岡古墳	71
(11) 北原遺跡	72



遺跡位置図

61年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
1	下川津遺跡	坂出市川津町	集落跡	弥生時代～室町時代	瀬戸大橋架橋に伴う事前調査
2	永井遺跡	普通寺市下吉田町	〃	縄文時代～江戸時代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査
3	西碑殿遺跡	〃 碑殿町三反畑	〃	弥 生 時 代	〃
4	延命遺跡八反地地区	三豊郡豊中町上高野	〃	弥生時代～鎌倉時代	〃
5	一の谷遺跡群	觀音寺市本大町、古川町	〃	弥生時代～江戸時代	〃
6	長砂古遺跡	〃 池之尻町大長	〃	弥生時代～平安時代	〃
7	柞田八丁遺跡	〃 柞田町八丁	〃	古 墳 時 代	〃
8	旧香川郡条里	高松市上天神町、太田下町	条里跡	奈 良 時 代	一般国道11号線高松東バイパス建設に伴う確認調査
9	東原遺跡	綾歌郡綾南町大字陶字東原	集落跡	室 町 時 代	一般国道32号線綾南バイパス建設に伴う確認調査
10	旧多度郡条里	普通寺市与北町字京免	〃	奈良時代～室町時代	一般国道319号線普通寺バイパス建設に伴う確認調査
11	南谷遺跡	坂出市府中町南谷	その他の遺跡	平 安 時 代	埋文センター建設に伴う確認調査
12	〃	〃	〃	〃	〃
13	立石塚	綾歌郡国分寺町石船	その他の墓	不 明	県道改良に伴う事前調査
14	旧練兵場遺跡	普通寺市中村町、上吉田町	集落跡	弥 生 時 代	下水道幹線管渠に伴う事前調査
15	ひさご塚古墳	觀音寺市木の郷町三谷483,484	古 墓	古 墳 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
16	大石北谷古墳	大川郡長尾町前山字大石97	〃	〃	遺跡整備に伴う確認調査
17	高松市茶臼山遺跡群	高松市新田町乙27番地1	〃	〃	土砂採取に伴う確認調査
18	山田郡条里	〃 松縄町675番地1他	条里跡	奈 良 時 代	太田第2土地区画整理事業に伴う確認調査
19	王子権現社古墳平石上1～4号墳	〃 三谷町2003他	古墳、塚	古 墳 時 代	圃場整備に伴う確認調査
20	平石上2号墳 同4号塚	〃 〃 2133-1	〃	〃	圃場整備に伴う事前調査
21	佐料遺跡 佐料城跡	〃 鬼無町佐料186,187	集落跡 城館跡	弥生時代～室町時代	水路改修に伴う事前調査
22	淨願寺山8,10号墳	〃 飯田町1414	古 墓	古 墓 時 代	学術調査
23	木野戸古墳	〃 中山町763番地4	〃	〃	お堂改築に伴う事前調査
24	与島西山中旧石器散布地	坂出市与島町字西方647他	散布地	旧石器時代	電源開発本四連系線架設に伴う事前調査
25	大浦浜師楽遺跡	〃 横石町字大浦通り755他	包藏地	古 墓 時 代	〃
26	坂出市福江町所在の埋蔵文化財包蔵地	〃 福江町2丁目602-1	〃	江 戸 時 代	〃
27	坂出市花町所在の埋蔵文化財包蔵地	〃 花町397	〃	旧石器時代	〃

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
本四公団	38,200	県教委	本四公団	発掘調査	57条の3	大山、壽山、藤原、丹波、北野、須田 大久瀬、船道、二ノ安藤、浅二 今井、寺内、石川、西園、山口	61.4.7～ 62.3.31
道路公団	17,700	〃	道路公団	〃	〃	渡部、安藤、三好 植田、山元	61.4.1～ 61.12.23
〃	800	〃	〃	〃	〃	蘿井、三好	61.7.28～ 61.8.11
〃	1,000	〃	〃	〃	〃	伊沢	61.9.1～ 61.9.30
〃	16,000	〃	〃	〃	〃	岸上、西園、岡田、北山 馬淵、田淵、清水、藤崎	61.4.1～ 61.12.25
〃	5,200	〃	〃	〃	〃	小西、松浦、磯崎	61.4.1～ 61.9.9
〃	13,420	〃	〃	〃	〃	小西、磯崎、松浦 中西、片桐、竹内	61.4.3～ 62.1.27
建設省	306	〃	国、県	〃	98条の2	中西	61.12.17～ 61.12.25
〃	280	〃	〃	〃	〃	〃	61.12.1～ 61.12.10
〃	390	〃	〃	〃	〃	〃	61.12.12～ 62.1.16
県	124	〃	県	〃	〃	廣瀬	61.6.16～ 61.6.30
〃	800	〃	〃	〃	〃	中西	61.11.10～ 61.11.26
〃	10	〃	〃	立会調査	57条の3	中西	61.11.28
〃	20	〃	〃	発掘調査	〃	〃	62.2.26～ 62.3.5
〃	7,000	〃	〃	測量調査	98条の2	國木	62.3.5～ 62.3.11
長尾町	148	町教委	長尾町	発掘調査	〃	香川大学	62.3.15～ 62.4.30
個人	50	市教委	高松市	〃	〃	市教委職員	61.6.12～ 61.7.28
高松市	3,600,000	〃	国、県、高松市	分布調査 発掘調査	〃	〃	61.11.17～ 62.3.27
三郎池土地 改良区	8,007	〃	県三郎池土 地改良区	発掘調査	〃	〃	61.5.19～ 61.6.10
〃	100	〃	〃	〃	57条の2	〃	61.6.20～ 61.8.8
高松市	248	〃		立会調査	57条の3	〃	61.9.17
香川大学	100	香川大学	香川大学	発掘調査	57条	香川大学	61.7.20～ 62.3.31
個人	66	市教委		立会調査	57条の2	市教委職員	61.7.30
電源開発	5	県文化財保護 協会坂出支部	電源開発	〃	57条の3	県文化財保護協 会坂出支部	61.7.3
〃	400	〃	〃	〃	〃	〃	61.4.14～ 61.5.10
〃	100	〃	〃	発掘調査	〃	〃	61.8.20～ 61.8.31
〃	104	〃	〃	〃	〃	〃	61.7.28～ 61.8.19

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
28	坂出市新浜町所在の埋蔵文化財包藏地	坂出市新浜町2717-1 他	包藏地	旧石器時代	電源開発本四連系線架設に伴う事前調査
29	大浦浜遺跡 ガント浜遺跡	〃 横石町大浦, 家群,北浦	〃	縄文時代 ~鎌倉時代	県道建設に伴う事前調査
30	白石石器散布地	〃 沙弥島211番地 他	散布地	旧石器時代	遊点道,園地整備に伴う事前調査
31	ナカンダ浜遺跡	〃 沙弥島字北通り 167-1 他	包藏地	縄文時代 ~室町時代	施設建設に伴う事前調査
32	下川津遺跡	〃 川津町4302番地	集落跡	弥生時代 ~室町時代	水路改修に伴う事前調査
33	〃	〃 〃 宇山田 4043-1 他	〃	〃	公園造成に伴う確認調査
34	讃岐国分寺跡	綾歌郡国分寺町国分字上所	寺院跡	奈良時代	史跡整備に伴う確認調査
35	本法寺西古墳	〃 綾南町大字羽床 下849-1	古 墓	古 墓 時 代	土砂採取に伴う確認調査
36	石塚山古墳	〃 綾歌町栗熊西 882-7	〃	〃	農道建設に伴う確認調査
37	〃	〃	〃	〃	農道建設に伴う事前調査
38	中村遺跡	普通寺市稻木町 他	集落跡	縄文時代 ~江戸時代	県道建設に伴う事前調査
39	稻木遺跡	〃 下吉田町字本 村東443-2	〃	弥生時代 ~平安時代	農協倉庫建設に伴う事前調査
40	備中地遺跡	仲多度郡琴南町造田 920-3 他	〃	弥 生 時 代	県道拡幅に伴う事前調査
41	大原塚古墳	三豊郡三野町大字吉津 乙1330番地2-2	古 墓	古 墓 時 代	圃場整備に伴う確認調査
42	大原塚古墳	〃	〃	〃	圃場整備に伴う事前調査
43	宮脇遺跡	三豊郡豊中町大字笠田 笠岡	集落跡	鎌 倉 時 代	圃場整備に伴う確認調査
44	高野城跡	〃 大字上高 野字七尾	城 跡	室 町 時 代	土砂採取に伴う確認調査
45	ひさご塚古墳	観音寺市木之郷町三谷 482-3	古 墓	古 墓 時 代	〃
46	久染遺跡	〃 池之尻町字久 染890 他	集落跡	弥生時代 ・古墳時代	圃場整備に伴う事前調査
47	谷間が原遺跡	〃 古川町字谷間 原1219-1 他	〃	古 墓 時 代	水路改修に伴う事前調査
48	高屋庵寺	〃 高屋町1911番 地2	寺院跡	奈良時代	市農協事務所改築に伴う事前調査
49	石田遺跡	〃 池之尻町194 -1 他	集落跡	古墳時代 ~室町時代	水路改修に伴う事前調査
50	久染遺跡	〃 字久 染990-1 他	〃	弥生時代 ・古墳時代	〃
51	緑塚古墳群	三豊郡大野原町大字丸 井緑塚	古 墓	古 墓 時 代	土砂採取に伴う事前調査
52	雲岡古墳	〃 豊浜町大字和田 甲1634番地	〃	〃	圃場整備に伴う確認調査
53	北原遺跡	〃 財田町財田中 4323	社寺跡	鎌 倉 時 代	〃

調査

原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
電源開発	600	県文化財保護協会坂出支部	電源開発	発掘調査	57条の3	県文化財保護協会坂出支部	61.9.1~ 61.9.20
県	400	市教委	県	〃	〃	発掘指導 國木	61.10.21~ 61.12.8
県	383	〃	〃	〃	〃	市教委職員	61.11.10~ 61.11.24
坂出市	100	〃	坂出市	〃	〃	〃	61.11.~ 62.2
〃	214	〃	〃	〃	〃	〃	61.3.12~ 61.3.31
〃	513	〃	〃	〃	98条の2	〃	62.2.27~ 62.3.11
国分寺町	1,500	町教委	国、県、国分寺町	〃	〃	町教委職員	61.5.21~ 61.11.30
個人	100	〃	県、綾南町、個人	〃	〃	町教委職員 発掘指導 國木	61.4.9~ 61.6.2
綾歌町	100	〃	綾歌町	〃	〃	町教委職員	61.7.23~ 61.8.27
〃	1,500	〃	〃	〃	57条の3	町教委職員 発掘指導 國木	61.12.6~ 61.3.31
県	4,500	市教委	県	〃	〃	発掘指導 松本	61.4.1~ 62.3.31
香川県経済農業 協同組合連合会	500	〃		立会調査	〃	市教委職員	61.7.21
県	250	町教委	県	発掘調査	〃	町教委職員 発掘指導 中西	61.9.16~ 61.10.13
三野町 土地改良区	20	〃	三野町土地 改良区	〃	98条の2	町教委職員 発掘指導 國木	61.7.22~ 61.7.24
〃	100	〃	〃	〃	57条の3	〃	61.9.26~ 61.10.18
豊中町	300	町教委	豊中町	発掘調査	98条の2	町教委職員	61.10.13~ 62.2.6
〃	50	〃	〃	〃	〃	〃	61.7.1~ 61.7.10
個人	178	市教委	観音寺市	〃	〃	市教委職員	61.2.16~ 62.3.6
観音寺市	450	〃	〃	〃	57条の3	〃	61.7.24~ 61.8.25
〃	63	〃		立会調査	〃	〃	61.5.26~ 61.5.27
市農協	150	〃		〃	〃	〃	61.10.11~ 61.10.14
観音寺市	287	〃		〃	〃	〃	61.12.5~ 61.12.19
〃	141	〃		〃	〃	〃	62.2.2~ 62.2.11
大野原町	3,000	町教委	大野原町	発掘調査	〃	町教委職員 発掘指導 高橋邦彦	61.4.1~ 61.3.31
豊浜町	150	〃	豊浜町	〃	98条の2	町教委職員 発掘指導 國木	61.10.6~ 61.10.19
県	6	〃	財田町	〃	〃	〃	61.7.22~ 61.7.24

下川津遺跡

所在地 坂出市川津町 調査期間 昭和61年4月7日～62年3月31日

昨年度より実施している下川津遺跡の調査は、瀬戸大橋坂出インターチェンジ建設工事に伴う発掘調査である。

調査対象面積は、89,600m²を測り、それを昭和60年より3ヶ年間で実施するという計画で、本年度は2年目にあたり、調査面積は、41,200m²とかなり広い。

遺跡を広範囲に調査する最大の利点は、居住域、生産域、墓域等を含め、遺跡の全体像を捉えやすい点である。今回の調査も例外に漏れず、様々な成果があがった。

本遺跡の旧地形は、集落が占地する標高4～5mの4つの微高地と、その周辺をめぐる

下川津調査区位置図 1/25,000



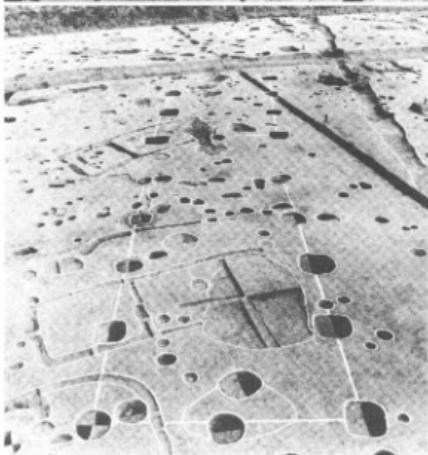
数条の弥生～鎌倉時代の自然河川より構成される。微高地は、北から第1～第4微高地と仮称され、本年度は、第3微高地を除く全ての微高地と西側の河川部を主体として、調査を実施した。

微高地の集落は、途中数期の断絶期を含むが、弥生時代前期より室町時代末まで、最小5期区分できる。I期は弥生時代前期、II期は弥生時代後期末～古墳時代前期、III期は古墳時代後期後半～平安時代前半、IV期は平安時代後半～鎌倉時代、V期は室町時代末である。

I・II期の集落は第1・2微高地上を中心とした、小規模な集落である。I期の遺構は削平によるものか、残りが悪いが住居址、溝、土壙等が微高地上に散布していた。II期は竪穴住居、土壙、溝、水田址等で構成される。竪穴住居は36棟確認され、その分布より見れば、3～5棟前後の小規模な集団が、自然河川沿いに数グループに分かれ分布している。III期の集落は、竪穴住居を含む竪穴住居22棟、掘立柱建物約30棟、溝、水田址等より構成される。そして、奈良時代までには、住居は全て、掘立柱建物へと切り変わる。集落の範囲は、全て微高地上で展開し、その規模も大きくなる。第1微高地上の西側では、当時の官人クラスの人間の存在が伺われる規格配置をされた、掘立柱建物群が検出された。この時期に当たる遺物は、墨書き土器・縄釉陶器・越州窑青磁椀・石帯・円面鏡・土馬・陶馬、木製品では、鞆・木製鞍橋・鎧・独楽・琴柱・等の一般集落では出土しない遺物が多く出土した。これらのことを見まえれば、当時の下川津遺跡に官衙的要素を抽出できるが、詳細な点は今後の課題となる。III期以降、集落は再び一般住民の集落に戻るが、IV期には、官衙や中央直結の莊園から出土するものがある。奈良春日大社の莊園の

記録もあり、今後の課題となる。V期には、第1微高地上に、有力自営農民層によるものとみられる、掘割りで囲む屋敷跡が検出された。

以上が、61年度調査の概要である。調査はその後最後の年である、62年度へと引き継ぐ。



第1微高地周辺航空写真

第1微高地・奈良時代掘立柱建物群

南谷遺跡

所在地 板出市府中町字南谷 調査期間 昭和61年11月10日～11月26日

南谷遺跡は、城山の南東麓の讃岐國府跡推定地を見下ろす丘陵上に立地する。

昭和48年度に板出市教育委員会が尾根上を試掘調査し、末端で検出した時期・性格不明の集石遺構を、昭和56年度に県文化財保護協会板出支部が発掘調査している。

今回の調査地点では、昭和51～56年度に労作協が造成工事を行い、尾根上を削平した場所である。当該地が香川県埋蔵文化財センター建設用地となったことから、工事に先立ち、県教育委員会が昭和61年7月に再度試掘調査を行った。その結果、尾根上及び斜面部において遺構を検出したことにより、上記の日程で本調査を実施した。

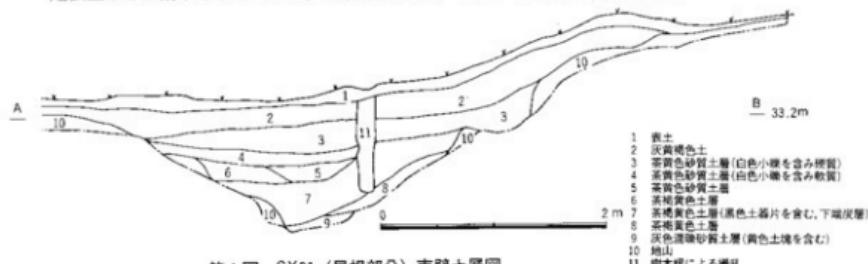
SX01は尾根を南北方向に切断して、北斜面では北西から西方向へ、南斜面では南西方向へ、弧を描いたように下る溝状遺構がある。

尾根上では幅4.7m、深さ1.6mを測り、底の幅は0.5m前後あるものの、ほぼV字形を呈する。尾根上を中心に広い範囲で、底から花崗岩破碎砾や河原石が数個ずつ点在している。南斜面の末端では岩盤にU字形に掘り込まれているが、次第に狭まり、消滅する。尾根上やや北寄りでは極めて浅くなる。北斜面に向かって数条に分岐し、一部は再び集束し、あるいは途中で消滅する(SX02～05)。また、北斜面の下方でも、平行する2条の溝(SX06・07)を検出した。

尾根上はほぼ削平されていたが、北縁辺部で浅いビット(SP01)を検出した。



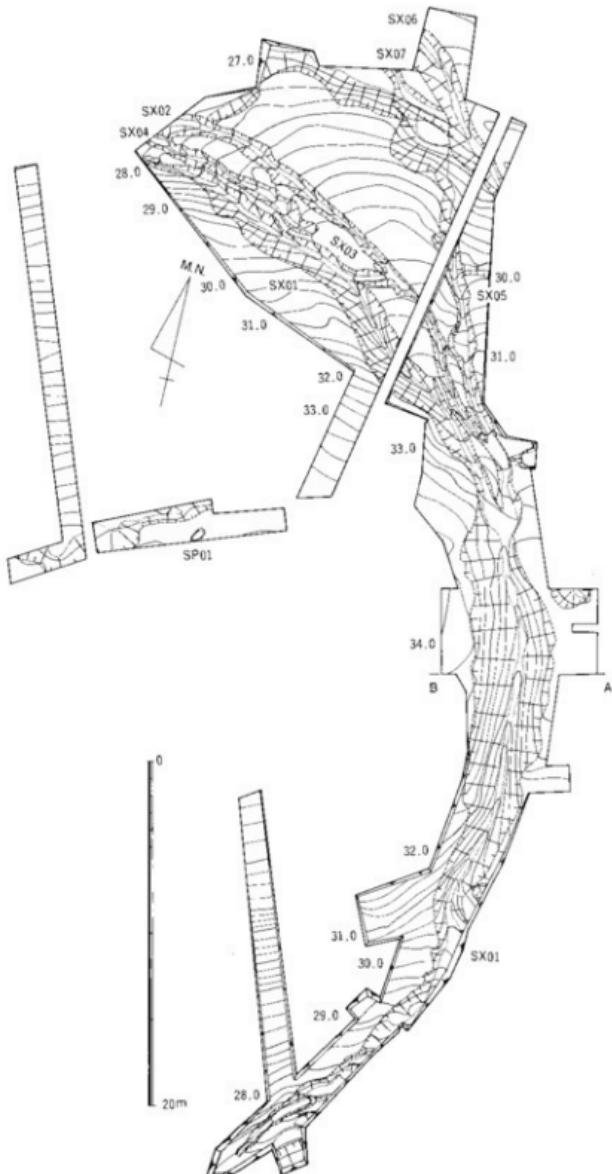
府中・南谷遺跡位置図



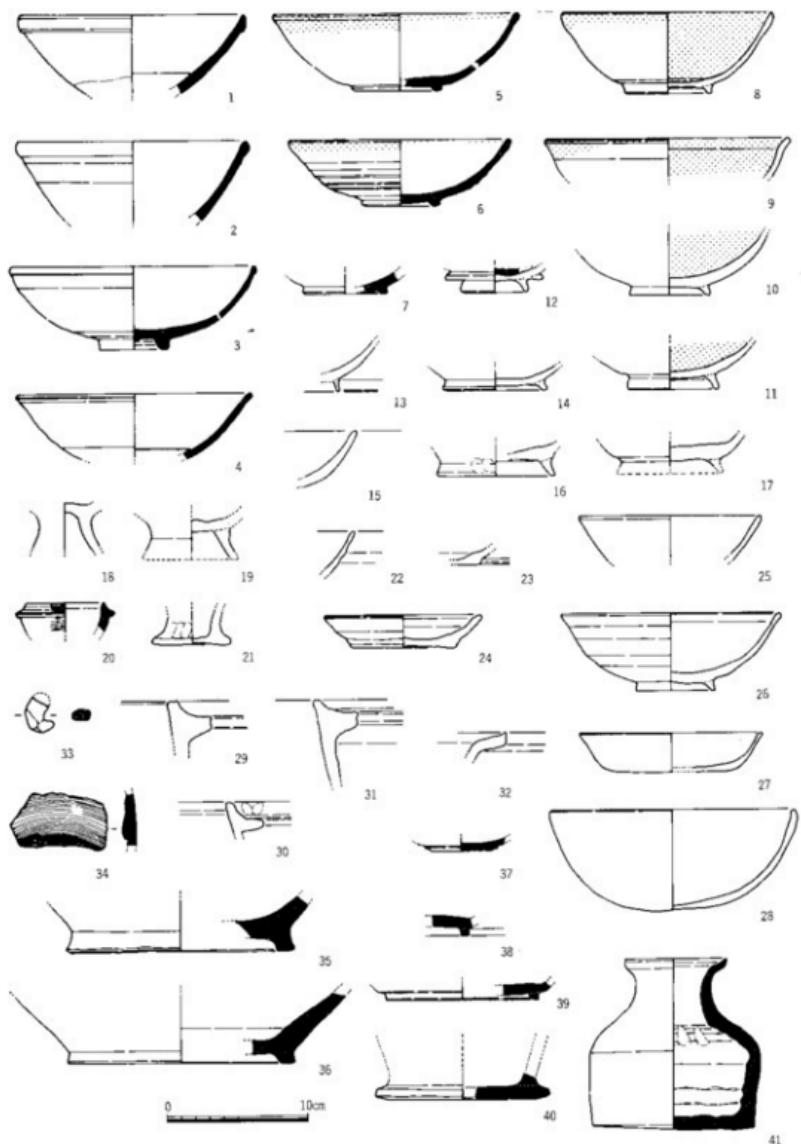
第3図1～4は白磁碗である。5～7は瓦質土器塊、8～12は黒色土器塊である。12は体部の下に水平の突出部をもつ。13～19・21～32は土師器である。20は瓦質のミニチュア羽釜である。33は手捏ねの勾玉形土製品と思われる。39～41及び第4図1～3は須恵器である。34は提瓶の体部と思われる。37は粗雑な高台をもつ。40は鉢であろう。

第4図4～6は平瓦、7はサヌカイト製打製石庖丁である。

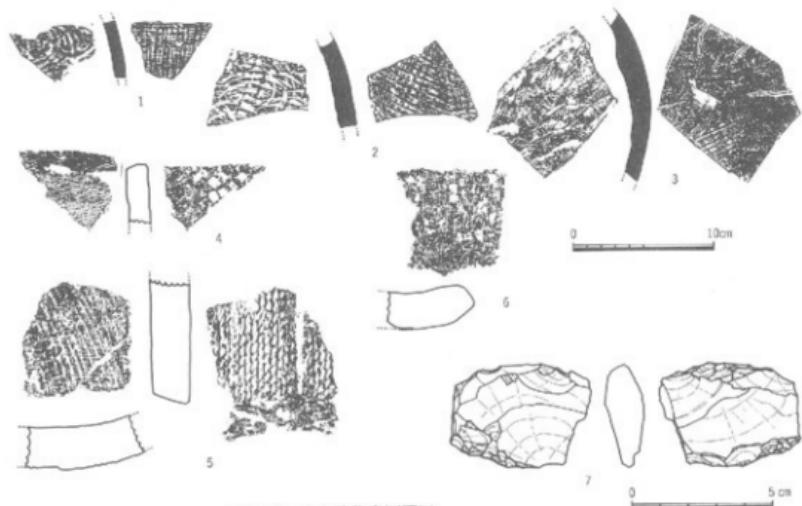
以上のうち、第3図20はSX03、28はSP01、41はSX06（埋土上層）、7・14～16・18・19・21・36、第4図3・6・7は遺構外の腐植土下の堆積土中から出土した。他はすべてSX01から出土した。SX01でも殆どは上層からの出土であるが、第3図3は7層（第1図）最下面に堆積した炭層から出土している。大宰府編年のII類1に属し、11世紀後半から12世紀初頭のもとと考えられる。



第2図 遺構全体図



第3図 出土遺物実測図(1) (体部内外面マミは灰黒色部分)



第4図 出土遺物実測図(2)



第5図 遺跡遠景（南東から）



第6図 北側斜面部の遺構

以上が南谷遺跡の概略である。SX01～07は溝状遺構の様相を呈しているが、その性格は類例も少なく、判断し難い。本来は、既に削平された部分と共に検討されるべきであろう。少なくともSX01は、古代のある時期まで機能し、古代末には埋没し始めた遺構であると述べるに留めておきたい。



第7図 SX01（尾根部分・北から）

ひさご塚古墳

所在地 観音寺市木の郷町三谷

調査期間 昭和62年2月16日～3月6日

ひさご塚古墳の所在する観音寺市母神山一帯は、50数基の古墳が集中する県下最大規模の群集墳を形成しているが、中でも当古墳は全長41mの前方後円墳であることから盟主的な古墳であったと考えられる。

近年では、当古墳を含む母神山一帯に開発の波が押し寄せており、その対応資料の作成が急務となっていることから、香川県教育委員会は例年実施している重要遺跡確認調査の昭和61年度事業として、ひさご塚古墳の測量調査を実施することにした。調査面積は7,000m²である。なお、調査の主眼の一つに周濠の規模等の確認があり、観音寺市教育委員会が後円部南側

で試掘調査を並行して実施した。古墳の規模、年代等については、その所見に基づくものである。

古墳の全長は、試掘調査で確認した周濠の肩から前方部裾まで約44mをはかり3m程度後世の掘削を受けていることが判明した。後円部直径については、古墳東側の周濠がかなり埋没していると考えられるが、46.5m付近を墳丘基底部に想定し、約26mとするのが妥当であろう。古墳の高さについては後円部5.7m、前方部5.1mをはかり、0.6mの比高差が認められる。

周濠は前方部北東側で約1m段差をもって東側に立ち上がる。単に埋没による結果とは考えられず、一考が必要であろう。また、墳丘東側については、47mのセンター付近を周濠外側の肩とし、それより内側を古墳域とするのが妥当であろう。

主体部についての情報は得られなかつたが、試掘調査で出土した埴輪より6世紀前半の築造が考えられる。母神山古墳群中でも最古の部類に属するものであり、同古墳群の形成ばかりでなく、古墳時代後期の三豊地域の歴史的発展を考える上でも極めて貴重な古墳と考えられる。

*周濠、遺物等は観音寺市教委の御好意により調査中に実見。



ひさご塚古墳位置図



第1図 墳丘全景（西より）



櫃石島県道調査

所在地 坂出市櫃石町大浦、家群、北原

調査期間 昭和61年10月21日～12月8日

昭和61年6月3日、香川県土木部長より県教委に県道櫃石島線建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査の協議文書が提出され、8月1日現地踏査を実施した。その結果、大浦浜地区(焼山東麓地区)、ガンド浜地区については発掘調査を実施し、王子神社東麓地区については試掘調査を実施することとなった。調査実施に際しては、道路課と坂出市教委との間で発掘調査委託契約書が交わされ、市教委が調査主体となって県教委が調査指導を行うという方法を探った。以下、各地区的概要を記すことにする。

大浦浜地区は焼山の東方に扇状地状に広がる低地部分である。当初低地部分の路線内約700m²を全掘する予定であったが、路線片側の調査によって遺構が確認されず、折り返し調査を中止したため調査面積は200m²である。

土層は基本的に6層に区分された。第3層の黒灰色土上面及び第5層の青灰色砂質土上面で各々中世の遺構、縄文時代の遺構が予想されたが、いずれも検出されなかった。第5層中より縄文土器、石鎌、石匙等が出土しているが、同層位中より青磁片、須恵器片も出土しており完全な流れ込み堆積層と考えられる。第6層以下は厚い砂質土層となるため、調査を終了した。

王子神社東麓地区は旧石器散布が予想される地区である。1.5m×4mの調査区を2か所設定し試掘を実施したが、現地表下約30cmで花崗岩壁に達し、旧石器の散布も認められなかったので、本格調査は不要であると判断した。

ガンド浜遺跡は島の北東部にある小さな入江に広がる低地部分であり、調査区は浜のほぼ中央部150m²(25m×6m)である。既に製塙上器の散布地として知られているが、調査の結果縄文時代から鎌倉時代の複合遺跡であることが判明した。

土層は6層に大別される。耕作土



櫃石島県道調査位置図



第1図 大浦浜遺跡(焼山東麓地区) 完掘状況

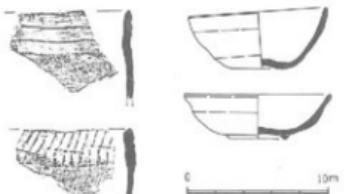
下の第2層（黒褐色土）は製塩土器及び中世遺物包含層である。製塩土器は古墳時代前期と後期のものがあるが、出土量はさして多くなく出土状態からみて流れ込みによるものと思われる。路線南側での出土が頗著であることから、浜南部に製塩にかかわる遺構の存在も考えられる。中世土器は浜中央より海寄りでの出土が頗著である。年代は鎌倉時代後期から南北朝時代と考えられ、低地より西に250mほど谷筋を逆上った同時期の寺院、墓地遺跡であるガンド遺跡に関連した遺跡であろう。なお、A7区～B7区にかけて同層位中より以下に、約60cmの高さに人頭大～上半身大の塊石を積み上げた石組遺構を検出している。位置的には、現海岸線より10m内陸に入った地点で、現海岸線とは平行に直線的に組まれた遺構である。石組み上や付近から同時期の土器が大量に出土しており、また石組みより海側は厚い砂層となることから、同時期の護岸施設ではないかと思われる。

第3層（黒色土、第4層はやや紫がかる）から第5層（灰黒色砂質土）は縄文土器包含層である。出土範囲は先の石組遺構より内陸側の低地部分全域であり、堆積層の厚さは約60cmである。時期的には後期の磨消縄文から晩期の突帯文土器まであるが、各層が単一型式の包含層とはなっておらず、混合層となっている。

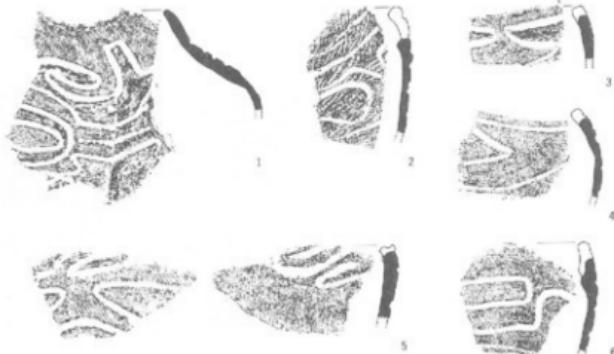
縄文土器は型式からみて次の4類に大別される。第1類は



第2図 ガンド浜遺跡調査区



第3図 第2層出土製塩、中世土器



第4図 縄文土器実測図

磨消繩文土器（第4図）である。曲線的な太い沈線内に縄文が施文されたもので、型式的には中津式土器に相当するものと考えられる。

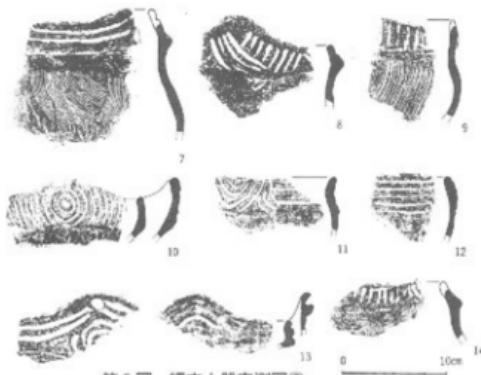
第2類は縁帶文土器群（第5図7～14）である。肥厚した口縁の外側に、平行、

同心円、あるいは斜行の沈線文によって区画された磨消繩文をもつ。胴部に櫛描きによる多条沈線を垂下したもの（7、9）もある。後期中葉の彦崎KI式の特徴をもつ土器群である。

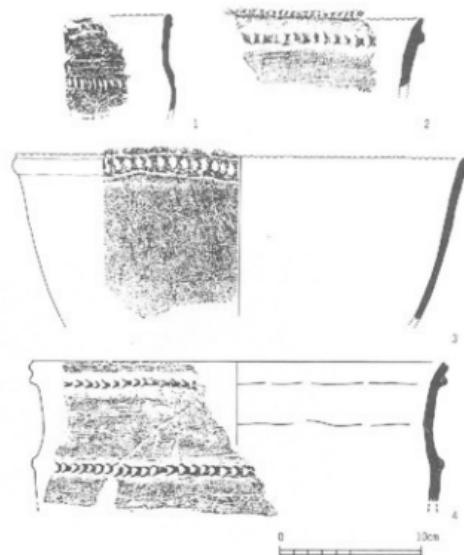
第3類は数量的に稀少であるが、口縁部に突帯状の肥厚帯をもち、頸部と肩部の境界には爪形文が帯状に施されるもの（第6図1）である。頸部に沈線はみられないが、口縁上端に刻み目がみられることからみて、原下層式に類似した内容をもつ土器である。

第4類は突帯文土器群（第6図2～4）である。深鉢形土器には、肩部が張った二重突帯をもつもの（4）と、直口のもの（3）がある。また、口縁上端に刻み目をもつものともたないものとともに細分可能であるが、ほとんどが未整理であるため、型式細分は他日を期したい。

遺構としては、B-5～6区にかけての位置に第4層上面から掘り込まれた、一辺2m、深さ0.3mの方形土坑を検出している。埋土に炭化物を含むが、柱穴は検出されず住居跡との断定はできなかつた。時期的には縄文時代晩期のものと考えられる。

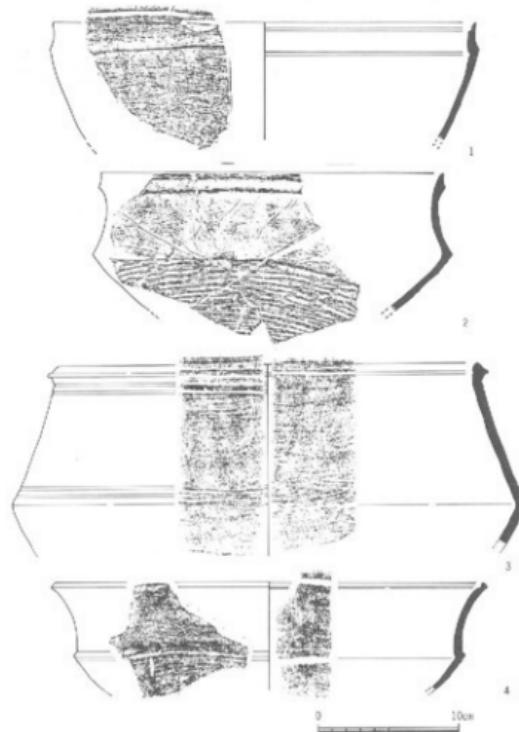


第5図 縄文土器実測図②



第6図 縄文土器実測図

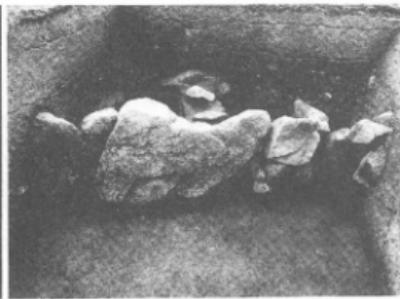
ガンド浜遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であり、特に縄文時代後期～晩期の一括資料は大浦浜遺跡の空隙を埋める可能性もあるため、当時の島しょ部の居住領域を考える上で興味深い遺跡と考えられる。また、遺物包含層は低地部分全域に広がっているため、浜全域に関連遺跡が所在する可能性が高いと思われる。



第7図 縄文土器実測図



第8図 ガンド浜遺跡B区完掘状況



第9図 ガンド浜遺跡中世石組遺構

本法寺西古墳

所在地 綾歌郡綾南町大字羽床下849—1

調査期間 昭和61年4月9日～6月2日

本法寺西古墳は、綾川中流域に開けた羽床盆地の南方、通称東光寺山と呼ばれる標高約70mの北向き丘陵上に位置する。当地は、遺跡台帳に記載されていなかったが、土地所有者が土砂採取のため掘削を行っていたところ、須恵器片が多数採集されたため、確認調査を実施するに至った。

墳丘は直径約11m、高さ約1mの円墳であり、地山整形の後約80cm盛土を施して築成している。埋葬施設として小堅穴式石室及び横穴式石室を検出したが、両石室間の土層観察によれば、小堅穴式石室及びその封土がまず築造され、その後横穴式石室を主体部とする墳丘が築造されたものと考えられる。

横穴式石室は玄室長1.7m、同幅2.7mをはかる所謂T字形の形態であり、羨道部は長さ2m、幅0.7mをはかる。構築は地山整形面を約1m掘り込んだ墓壙内で石積みの後、地山面上では石積みと墳丘盛土を並行して実施するものである。基底石にやや大きめの扁平な塊石を使用し、上部は人頭大の塊石を持ち送りに構築している。床面は厚さ10cmの裸床である。

当石室の特筆すべき遺構として、入念な作りの排水溝がある。玄室四壁の基底石下に幅10～20cm、深さ7cmのU字溝をめぐらし、板石による蓋石を施して暗渠とするもので、溝は羨道部に並べられた棒状あるいは板状石の下をくぐり、羨門外では再び板石の蓋による暗渠方式を探る。端部は板石を立てて栓をした形になっており、素振りの墓道へつながる。

遺物は玄室より各種須恵器59個体、土師器、鉄刀、管玉等、また、墳丘上から、須恵器大甕、杯等を検出した。当石室は6世紀中葉頃に築造され、7世紀初頭まで追葬が実施されたものと考えられる。なお、綾南町教育委員会より近く報告書が刊行される予定である。



本法寺西古墳位置図



第1図 本法寺西古墳石室

石塚山古墳群

所在地 綾歌郡綾歌町栗熊西882-7 調査期間 昭和61年7月23～8月27日、61年12月6日～62年3月31日

石塚山古墳群は綾歌町の南に連なる連峰から北に延びた低丘陵先端付近に位置する。当該地が農道整備事業によって掘削されることになり、昭和61年7月23日より古墳の員数、主体部の内容等を確認するための調査を実施した。その結果、4基の古墳が所在することは判明したが、詳細は不明であったため本格調査を実施することになった。

4基の古墳は南から1号、4号、2号墳、さらに2号墳の西側に3号墳とL字形の配列をとる。

1号墳は全長約25mをはかる前方後円形の墳丘を持つが、前方部とは反対側の隅部にも

石塚山古墳群位置図

低い張り出しを持つ。後方部は1辺17m、高さ2.3mをはかり、地山を1.7m削り出した後約0.6cmの盛土によって築成している。主体部として、竪穴式石室、箱式石棺を検出している。

2号墳は直径25m、高さ3.5mの円墳で、1.2m地山削り出しの後、2.3mの盛土によって築成している。主体部として板石積みによる竪穴式石室、箱式石棺、壺棺、土壙を検出している。竪穴式石室は墳丘盛土と並行して構築した石積みの墓壙壁の中に構築されたもので、床面は板石敷きである。内部から鉄劍、鉄片等が出土している。

3号墳は直径14m、高さ1.3mの後円部から西に低く延びた前方部を持つ前方後円墳である。前方部先端が掘削されているため全長は不明である。主体部として小竪穴式石室2基、土壙1基を検出している。

4号墳は地山整形のみによる高さ0.7mの墳丘をもつ。主体部は土壙1基である。

4基の古墳は遺物が稀少であったため、年代等明らかではないが、墳丘・主体部等からみて弥生終末期から古墳時代前期にかけて築造されたものと考えられる。



第1図 2号墳竪穴式石室石積墓壙壁

備中地遺跡

所在地 仲多度郡琴南町造田字備中地

調査期間 昭和61年9月16日～10月13日

(1) 立地と環境

備中地遺跡は、土器川と造田盆地で合流する支流の備中地川両岸の河岸段丘上に立地する。今回の調査地点は、備中地川南岸沿いにのびる庵山丘陵末端の北西裾に位置している。

(2) 調査の契機

備中地遺跡は、昭和28年、煙草乾燥場建築に伴う掘削・整地作業中に弥生土器が出土したことにより発見された。

その後昭和60年、県道府中・琴南線拡幅工事に先立って、県教委が試掘調査を行った。その成果を踏まえて、翌年、県普通寺市土木事務所の委託を受け、琴南町教委が調査主体



備中地遺跡位置図

となり、上記の日程で本調査を実施した。県教委は職員を派遣し、調査の指導にあたった。

(3) 遺構について（第3図）

調査対象面積は250m²、1車線の道路幅を2車線に拡幅する部分について、幅約4m前後、延長60mで発掘調査を行った。

耕作土、床土の下は厚さ20～50cmの濃密な弥生土器の包含層に至る。

包含層下では、各グリッドをゆるい弧を描いて東から西に継断する溝状遺構（SD01）と、その西端に広がりをもつ落込み（SX01）、また第3グリッドではSD01に平行して上手を北東から南西に走る溝状遺構（SD02）を検出した。

SD01は延長42m、幅は一定しておらず、平均1.5～2m、深さは0.2～0.25m程度である。

SX01は調査区外へ広がりをもつため、規模・形状は不明である。

SD01とSX01は遺構・埋土とともに連續性をもち、いずれも多量の弥生土器を出土した。出土遺物から、弥生時代後期後半から終末期にかけて機能したものと思われる。

SD02は延長18m、幅0.8～1m、深さ0.3～0.4mを測る。遺物量は少ない。弥生後期前半と思われる。

(4) 遺物について（第4図）

遺物は28ℓ入りコンテナ20箱分出土した。その9割以上が、SD01、SX01及びそれらの遺構を覆う包含層からの出土である。

出土遺物のほとんどは弥生土器で、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高坏・大型器台等の器種が見られ、他に打製石包丁・石鎌・磨石・繩文（押型文）土器などがある。

第4図に主なものを紹介する。1～3・5・6・14は壺形土器、4・7・8は高坏形土器、9は脚台付小型壺あるいは鉢の脚部と思われる。10～12は甕形土器である。中でも12は從来「播磨系土器」と呼ばれている、胎土に雲母を多く含み茶褐色を呈する土器である。ここでは2・4・7が同じ胎土である。13は押型文土器の口縁部である。粗大な横円文を外面にのみ施文している。

1～5・7～10・12がSD01、11がSX01、6が包含層、13・14が1グリッドで邊構面下の包含層からの出土遺物である。

(5) まとめ

今回の発掘調査は、わすが250m²という極めて限定された範囲において実施されたものであり、集落遺跡を想定しながらも住居跡を検出することはできなかった。しかし、多量の弥生時代後期の土器が出土し、資料の増加をみたほか、從来本県内陸部ではあまり知られていないかった繩文時代早期の押型文土器が出土したこと、近隣に同時代の遺跡が所在する可能性が高まった。

弥生土器についても、後期後半から終末期にかけての土器が大半であるが、中にはやや遅る段階のものも混在していることから、調査区から備中地川までの平坦な段丘上に広がっていると想定される集落域の存続時期を検討する上での材料となろう。

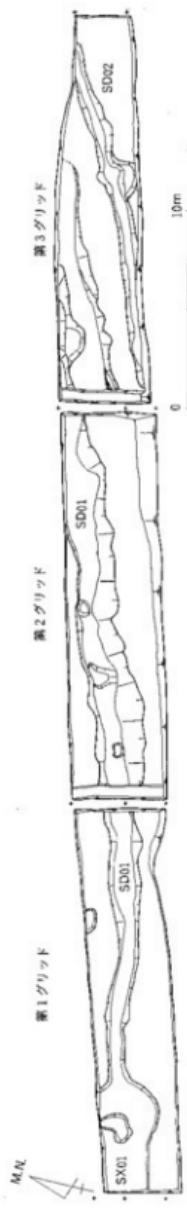
なお、詳しくは琴南町教育委員会から『備中地遺跡発掘調査報告書』が刊行されているので参考されたい。



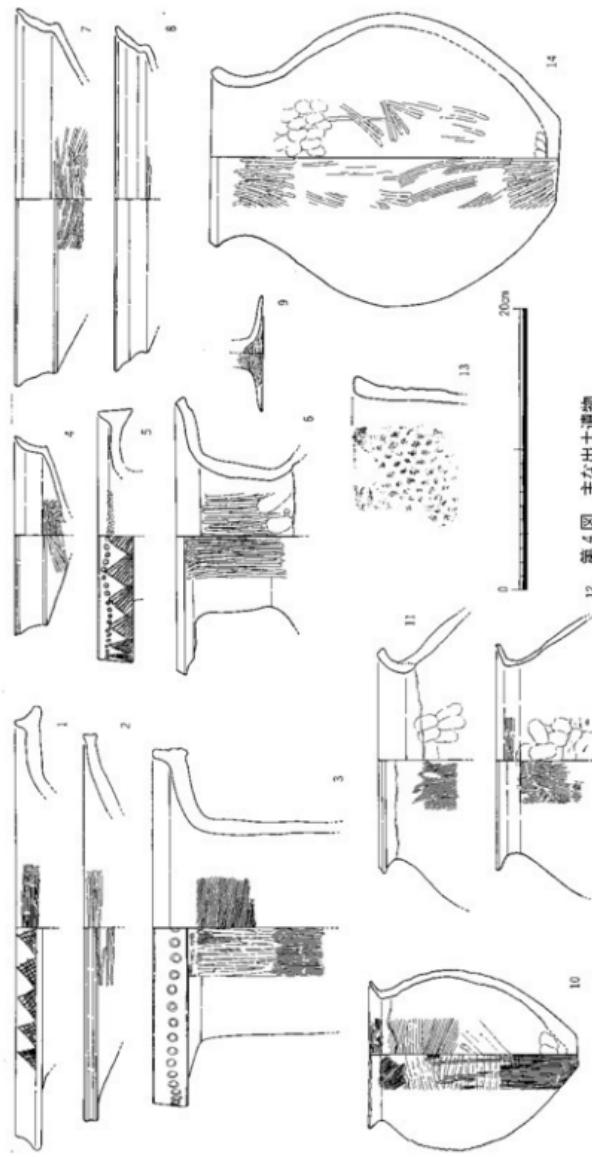
第1図 SD01（西から）



第2図 SD02（東から）



第3図 偏中地道路遺構全体図



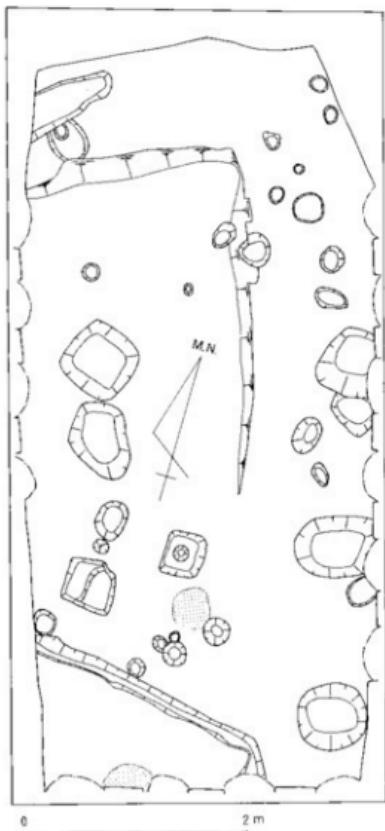
第4図 主な出土遺物

旧練兵場遺跡

所在地 普通寺市上吉田町字本村

調査期間 昭和62年3月5日～3月11日

旧練兵場遺跡は、普通寺市街地の北東寄り、現在の国立普通寺病院及び四国農業試験場を中心とした広大な範囲に広がると想定され、弥生時代のほぼ全時期にわたって継続的に營まれた大集落遺跡である。



第1図 調査区全体図



旧練兵場遺跡（調査地点）位置図

今回の調査は、中讃流域下水道工事に伴い、県道多度津・普通寺線内における立坑の掘削中、ピット等の遺構が検出されたことを契機として実施された。対象面積は約22m²である。

調査開始時、既に包含層は殆ど除去されており、半分の面積が遺構面より10cmほど下まで掘削されていた。

狭い範囲ながら遺構は濃密で、調査区の南端で竪穴住居跡の一部、ほぼ全面に1辺が40～60cm程度の隅丸方形の柱穴群及び小ピット群を検出した。柱穴群のうち東壁沿いの3穴は柱間距離1.6mを測り、東の調査区外に広がると思われる掘立柱建物の一部であろう。時期は不明である。

竪穴住居跡は、延長2.5mの範囲で検出した壁及び壁溝の方向からみて隅丸方形を呈すると思われる。柱穴は検出していない。鋼矢板際の床面上で焼土塊を検出したが、覆土・周りの床面から焼土

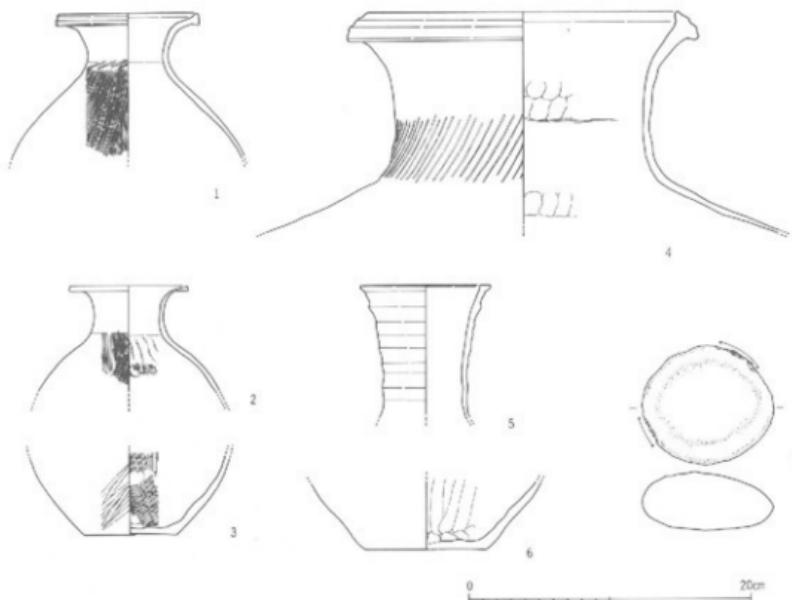
粒や炭化物は認められず、焼失住居かどうかは、不明である。第3図に示した遺物はすべて住居址内床面直上のものである。出土遺物から、この竪穴住居址は弥生時代中期後半の所産と思われる。

なお、調査中に100mほど北の立坑掘削を立会したところ、包含層・遺構とも検出できず、砂礫層を確認したことから、地形をも踏まえて河道跡を判断した。

旧線兵場遺跡は現在市街地化が著しく、その範囲を検討するのが困難になっているが、今後、今回のような小規模な調査を積み重ねることによって、長期間にわたる大集落遺跡の消長を把握するための情報が蓄積されることに期待したい。



第2図 調査区全景（南から）



第3図 住居址内出土遺物実測図

大原塚古墳

所在地 三豊郡三野町大字吉津乙1330番地2-2

調査期間 昭和61年8月27日～8月29日、9月26日～10月18日

大原塚古墳は三野町の北西部、汐木山と七宝山系に挟まれた微高地上に位置する。

三野町土地改良区は、当該地を含む周辺地域の圃場整備事業を5ヶ年計画で実施しており、古墳部分が昭和61年度の対象地となった。そのため、三野町教育委員会が遺跡の性格、時代等を確認するため、昭和61年8月27日から3日間試掘調査を実施し、マウンド全域に広がる塊石群と近世遺物を検出、近世の墳墓ではないかと思われた。しかし、塊石群の内容が不明であったため、県教育委員会の指導のもと、町教育委員会が主体となって本格調査を実施することになった。

調査の結果、塊石群は横穴式石室であることが確認され、遺跡は後期古墳であることが判明した。墳丘は、後世の開墾を受けており、規模、形態とともに不明であったが、地山整形後、全て盛土によって構築されている。

横穴式石室は、ほぼ東方向に開口する無袖に近い右片袖式である。玄室は長さ3.2m、奥壁幅1.05m、玄門部幅0.85mばかり、所謂羽子板状を呈するものである。羨道部が1.3mと極めて短いことと合わせ、三豊地域に一般的な石室形態である。

石室は、小型方柱状石を直列に配した基底石上に、やや扁平な塊石を小口積みにするものである。玄門部には、扁平な塊石を立てた玄門立柱がみられる。

石室床面は、塊石敷きの上層と、板石敷きの下層とに明瞭に区分される二重構造の敷石が施されている。上下両層上面から遺物が出土しており、追葬による結果と考えられる。

遺物は須恵器、鉄鎌、切小玉、ガラス小玉等が検出しており、それらの特徴から6世紀中葉頃に古墳が築造されたと考えられる。

なお、三野町教育委員会より調査報告書が昭和62年度に刊行されている。



大原塚古墳位置図



第1図 大原塚古墳横穴式石室

雲岡古墳

所在地 三豊郡豊浜町和田甲1634番地

調査期間 昭和61年10月6日～10月19日

雲岡古墳は豊浜町の北東部に位置しており、地形的には高尾山から北に派生するなだらかな微高地に位置する。旧状では直径10m、高さ1mほどのマウンドをっていた。

当該地を含む周辺地域が昭和61年度の圃場整備事業対象地となり、盛土部分を約1m掘削したところ石組みが露呈したために、その内容、性格等を把握するために確認調査を実施することになった。発掘調査は豊浜町教育委員会が主体となり、県教育委員会が指導にあたった。

古墳の盛土部分は工事によってほとんど削平されていたが、周辺の耕作土より石室を方形に巡る周溝を検出したため、墳形は方墳であることが判明した。その規模は11.2m×12.7mであり、石室主軸方向にやや細長い形態である。

主体部はほぼ南東方向に開向する無袖式の横穴式石室である。奥壁の2個の基底石と左側壁の一部及び隣床のみが旧状を留めていたのみであるが、左側壁側より玄門立柱の掘り方が検出され、玄室は長さ1.5mと極めて短いものであることが確認された。羨道の規模は不明である。

この横穴式石室について特徴的なものは次の3点である。

- ①なだらかな傾斜地であるが、石室の開口方位が傾斜に逆行するものとなっている。
- ②隣床は地山面より約20cm盛土を施した上に設置されたもので、また隣敷き範囲は通常の三豊地域の横穴式石室と異なり羨道部に及ぶ。
- ③玄室3壁の外側に排水溝が掘られている。

出土した遺物は須恵器のみであり、石室隣床下、隣床上、周溝内に大別される。いずれも7世紀末葉に比定されるものであり、古墳の築造をその時期に想定できると思われる。

なお、町教委より調査報告書が昭和62年度に刊行されており、詳細はそれを参照されたい。



雲岡古墳位置図



第1図 雲岡古墳横穴式石室

北原遺跡

所在地 三豊郡財田町財田中北原

調査期間 昭和61年7月22日～7月24日

北原遺跡は財田川蛇行流域に形成された低地に向かって西から東に延びる丘陵先端付近に位置する。旧状は4区画の水田からなり、県営圃場整備事業の対象として地下げが計画されていた。ところが、水田の耕作土を取り除いた段階で石列が検出され、6月13日に確認調査を実施、新たに柱穴群、焼土壙が確認された。その後、土地改良課と協議を重ねた結果、石列及び柱穴群については盛土によって現状保存することとし、焼土壙については保存が困難であり、小規模なものであるのでこの部分に限り調査を実施するに至った。

調査の結果、一辺約1.4m、深さ約20cmの方

形の土壙、及び幅約30cm、高さ30cmの燃焼部を検出した。その形状から、カマド跡とも考えられるよう、目的・時期等を明確にすることはできなかった。

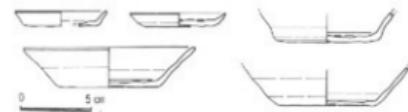
焼土壙の概要は以上の通りであるが、先の確認調査で検出した石列、柱穴群の概要を記すことにする。石列は丘陵平坦部中央よりやや山側（西側）に、南北約30mにわたって直線的に並べられている。その列石南端、中央、北端部分では直角に東方向にも延びる。形態からすれば雨落ち溝等の性格が考えられるが、詳細は不明である。

柱穴群は調査区中央より東側で検出している。いずれも径20～30cmほどの小規模なものであるが、東西方向に規則的に配列した柱穴列も検出している。先の列石以東の平坦面ほぼ全域に建物群の存在が予想される。

表探遺物であるが、土師器杯、小皿、巴文軒丸瓦等を検出しておおり、古代末～中世にかけての遺構と思われる。列石、柱穴群を一連のものと考えれば、単なる集落遺跡とは考えられず、館跡あるいは社寺跡といった性格も考えられる。



北原遺跡位置図



第1図 遺物実測図



第2図 焼土壙

昭和62年度

昭和62年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況	74
(1) 下川津遺跡	78
(2) 上天神遺跡	80
(3) 高松東バイパス試掘	84
(4) 本鶴遺跡	86
(5) 東原遺跡	89
(6) 要林公園	92
(7) 樋ノ口遺跡	93



遺跡位置図

62年度埋蔵文化財保護行政、調査の概況

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
1	下川津遺跡	坂出市川津町	集落跡	弥生時代～室町時代	瀬戸大橋架橋に伴う事前調査
2	杵田八丁遺跡	観音寺市杵田町八丁	〃	古 墓 時 代	四国横断自動車道建設に伴う事前調査
3	東原遺跡	綾歌郡綾南町大字陶字東原	〃	室 町 時 代	一般国道32号線綾南バイパス建設に伴う事前調査
4	上天神遺跡	高松市上天神町	〃	縄文時代～鎌倉時代	一般国道11号線高松東バイパス建設に伴う事前調査
5	旧山田郡条里	高松市林町、六条町	条里跡	奈 良 時 代	一般国道11号線高松東バイパス建設に伴う確認調査
6	本鴨遺跡	坂出市加茂町本鴨	集落跡	弥 生 時 代	一般国道11号線坂出・丸亀バイパス拡幅に伴う事前調査
7	〃	〃	〃	〃	〃
8	栗林公園	高松市栗林町1丁目10-26	庭園跡	江 戸 時 代	便所改築に伴う確認調査
9	樋ノ口遺跡	観音寺市本大町下1519番地	集落跡	縄文時代～弥生時代	マンション建設に伴う事前調査
10	長尾町名1673-1所在の埋蔵文化財包蔵地	大川郡長尾町名1673-1	社寺跡	鎌倉時代～室町時代	
11	高松市茶臼山遺跡群	高松市新田町乙27-1	集落跡	弥生時代・古墳時代	土砂採取に伴う確認調査
12	弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地	〃 林町1868, 1869番地	条里制	奈 良 時 代	遺跡内容把握のための確認調査
13	神高池北西古墳	〃 鬼無町山口153	古 墓	古 墓 時 代	市道改良に伴う事前調査
14	作山城跡	〃 香西南町680-1	城館跡	室 町 時 代	土砂採取に伴う事前調査
15	東杉尾遺跡	坂出市加茂町169番地他	集落跡	弥 生 時 代	水田畦畔改良に伴う事前調査
16	仏願古墳2号	〃〃 大字鷺の谷1620-10	古 墓	古 墓 時 代	土砂採取に伴う事前調査
17	杉尾神社南尾根古墳	〃〃 〃 1621-6	〃	〃	〃
18	坂出市沙弥島	〃 沙弥島字南通り70-1他			ふれあい会館建設に伴う確認調査
19	白石石器散布地	〃〃 218～221番地	散布地	旧石器時代	遊歩道建設に伴う事前調査
20	長崎鼻石蓋遺構	〃〃 223番地	石蓋遺構	弥生時代～古墳時代	〃
21	沙弥島4号墳	〃〃 70-1番地他	古 墓	古 墓 時 代	ふれあい会館建設に伴う事前調査

(1)

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
本四公団		県教委	本四公団	発掘調査	57条の3	大山, 藤田, 西村, 植松 中西, 松澤, 北山, 山本 山元, 田淵, 石田, 徳永	62.4.1~ 62.10.13
道路公団	480	〃	道路公団	〃	〃	磯崎	62.6.5~ 62.6.17
建設省	2,700	〃	建設省	〃	〃	大久保, 中西 國木, 植田	62.8.3~ 62.9.30
〃	5,000	〃	〃	〃	〃	大久保, 藤田, 石田 山元, 山本, 秋山, 和田	62.11.1~ 62.3.31
〃	6,000	〃	国, 県	〃	98条の2	大久保, 植田	62.10.5~ 62.10.31
〃	360	〃	建設省	〃	57条の6	大久保, 國木	62.5.7~ 62.5.9
〃	200	〃	〃	〃	〃	大久保	62.8.24~ 62.8.26
県	42	〃	県	〃	98条の2	國木	62.12.14~ 62.12.21
個人	530	〃	〃	〃	57条の5	片桐	62.6.26~ 62.7.9
				現状保存	〃		62.9.9
個人	2,500	市教委	高松市	発掘調査	98条の2	市教委職員	62.7.1~ 62.9.30
高松市	200	〃	国, 県, 高松市	〃	〃	〃	62.12.1~ 63.3.31
〃	100	〃	高松市	〃	57条の3	〃	62.2.1~ 63.2.10
〃	100	〃	〃	〃	〃	〃	63.3.1~ 63.3.31
個人	50	〃	坂出市	〃	57条の5	〃	62.5.19~ 62.5.31
山種建設	100	〃	山種建設	〃	57条の2	〃	62.2.15~ 62.3.31
〃	60	〃	〃	〃	〃	〃	62.12.21~ 62.1.31
坂出市	1,473	〃	坂出市	〃	98条の2	〃	62.8.24~ 62.9.10
〃	300	〃	〃	〃	57条の3	〃	62.8.4~ 62.8.21
〃	15	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	50	〃	〃	〃	57条の6	〃	62.10.14~ 62.10.23

番号	名 称	遺 跡			原 因
		所 在 地	種 類	時 代	
22	ガンド遺跡	坂出市櫻石159-1 他	社寺跡	鎌倉 時 代	市道改良に伴う事前調査
23	香西池堤防遺跡	綾歌郡国分寺大字福家字東羽間乙258	堤防跡	//	流通業務団地造成に伴う事前調査
24	平尾墳墓群	綾歌郡綾歌町岡田上平尾	墳墓, 古墳	弥生時代 ～古墳時代	観光開発に伴う事前調査
25	//	//	//	//	//
26	//	//	//	//	//
27	行末遺跡	綾歌郡綾歌町栗熊東45番地	集落跡	弥 生 時 代	スーパー建設に伴う確認調査
28	王墓山古墳	善通寺市善通寺町大池東1785番地の1	古 墓	古 墓 時 代	史跡整備に伴う確認調査
29	瓦谷遺跡	善通寺市善通寺町字瓦谷2851-5	散布地	//	宅地造成に伴う事前調査
30	九頭神遺跡	// 文京町2丁目 1番1号	集落跡	//	市道改良に伴う事前調査
31	紫雲出山遺跡	三豊郡詫間町大字積1708番地の2	//	//	土木工事に伴う事前調査
32	//	// // 大字大浜乙451番地	//	//	歌碑建立に伴う事前調査
33	高瀬町大字羽方字満池谷所在の埋蔵文化財包蔵池	三豊郡高瀬町大字羽方字浦池谷2147の1	社寺跡	平 安 時 代	県道改良に伴う事前調査
34	下新田原遺跡	観音寺市新田町字下新田1957-1 他	集落跡	弥 生 時 代	圃場整備に伴う事前調査
35	一の谷遺跡群	// 古川町字堂之南692 他	//	//	//
36	埴穴塚古墳	三豊郡大野原町大字花畠	古 墓	古 墓 時 代	//
37	大塚古墳	高松市鬼無町佐藤778	//	//	学術調査

調査							
原因者	面積(m ²)	調査主体	費用負担者	対処	文化財保護法	担当者	調査期間
坂出市	940	市教委	坂出市	発掘調査	57条の3	市教委職員	63.9.10～ 63.9.30
大林組	796	町教委		〃	57条の2	町教委職員	63.2.1～ 63.2.29
レオマ	1,000	調査団	レオマ	〃	〃	岡山理科大学	62.7.14～ 62.8.13
〃	530	〃	〃	〃	〃	〃	62.9.1～ 62.9.18
〃	1,000	〃	〃	〃	〃	町教委職員 発掘指導 國木	63.1.19～ 63.2.16
マルナカ	30	町教委	綾歌町	〃	98条の2	〃	62.4.25～ 62.4.26
普通寺市		市教委	国、県、普通寺市	発掘調査	98条の2	市教委職員	62.7.9～ 62.9.30
個人	3,222	市教委		立会調査	57条の2	市教委職員	62.12.15
普通寺市	2,080	調査団	善通寺市	発掘調査	57条の3	〃	62.10.1～ 63.1.14
詫問町	14,790	町教委	詫問町	慎重工事	〃		
〃	9	〃	〃	発掘調査	〃	町教委職員 発掘指導 高橋邦彦	62.9.11
県	90	県教委	県	立会調査	57条の6	北山	62.12.14～ 62.12.15
豊田土地改良区		市教委	観音寺市	発掘調査	57条の2	市教委職員	62.11.13～ 62.12.21
一の谷池 土地改良区	500	〃	〃	〃	〃	〃	62.11.10
大野原町	150	町教委	大野原町	〃	57条の3	町教委職員 発掘指導 高橋邦彦	62.10.5～ 62.12.19
香川大学	20	香川大学	香川大学	〃	57条	香川大学	62.9.3～ 62.9.31

下川津遺跡

所在地 坂出市川津町 調査期間 昭和62年4月1日～10月13日

下川津遺跡の調査は、瀬戸大橋坂出インターチェンジ建設工事に伴う発掘調査であり、調査面積は、89,600m²を測る。3ヶ年で調査を終了する計画で、昭和60年5月より本調査が開始され、本年度が最終年度にあたる。調査面積は19,800m²を測り、10月末日にはすべての調査が完了した。

下川津遺跡の旧地形は、集落が形成された標高4～5mの微高地と、その周辺をめぐる数条の自然河川によって構成される。微高地は、北から第1、第2、第3、第4微高地と仮称したが本年度は、第4微高地とその周辺の旧自然河川の調査が中心であった。第4微



下川津遺跡位置図

高地は、北側にSR-02と呼称した自然河川、東側をSR-03、西側をSR-11等によって囲まれた微高地である。

以下、この地域の遺構について概要を紹介する。

この微高地の遺構の特色は、120棟ほどの掘立柱建物跡が検出されたことである。規模としては、様々な規模が検出されているが、そのなかでは3間×2間が43棟で最も多い。尚、床面積は20m²前後で他の微高地の掘立柱建物跡と比すると、中間的な数値を示す。

これらの掘立柱建物跡の時期については、出土遺物が細片であり比定しがたいが、規模、方位等を勘案して分類すると、古墳時代後期23棟、奈良時代15棟、平安時代10棟、鎌倉時代27棟、残りは検討中である。また、これらの掘立柱建物跡の中に2間×2間を中心とした縦柱が12棟検出されたのも一つの特色である。

さらに、21区と呼称した発掘区および周辺から、一辺80cm前後の隅丸方形の柱穴をもつ下川津遺跡最大級の掘立柱建物跡が、4棟検出されている。時期は、現段階では古墳時代後期と比定している。この一群の掘立柱建物跡周辺にある溝状遺構からは、金銅製圭頭太刀把頭・碧玉製管玉・金銅製耳環・勾玉等が土器と共に出土しており、遺物・規模・周辺の状況から一般大衆の生活域とは性質を異なる遺構の広がりを感じさせている。この溝は、大型掘立柱建物に切られているが時期差はほとんど無いものと現段階では考えている。

そのほか、第4微高地では竪穴住居跡も28棟程度検出されている。規模は、4m前後の隅丸方

形でカマドの痕跡を残すものが多い。時期については、古墳時代後期のものが大半であると、現段階では比定している。

周辺の、自然河川については、紙面の都合で詳解できないがSR-11と呼称した自然河川の下層からは図版に掲げたような、土師碗、土師杯、土師皿、黒色土器、瓦器等が多量に出土しており、良好な一括資料である。

最後になるが、現在（昭和62年2月）整理作業を進めているので詳細については報告書の刊行を待ちたい。



21区遺景（南より）



SR11出土土器

上天神遺跡

所在地 高松市上天神町・三条町 調査期間 昭和62年11月1日～63年3月31日

上天神遺跡は高松市上天神町から三条町にかけて広がり、猫塚古墳・鶴尾神社4号墳等の古墳で有名な石清尾山の南東約2.5km、近世初期付替以前の旧香東川（ほほ、現在の御坊川の位置と推定）東岸の標高16m前後の沖積地面に位置する。62年度に実施した遺跡詳細分布調査で発見された遺跡で、今回は、国道11号線高松東バイパス建設に伴い、発掘調査を実施している。高松東バイパスに伴う文化財調査は今後継続的に行う予定であるが今年度はこのうち三条池北側部分5,000m²の発掘調査を実施している。



上天神遺跡位置図

東西約125m、南北約40mの今年度調査範囲

はちょうど微高地中央部に当たり、調査区の東西両端に向って、僅かに下がっている。検出した遺構・遺物は多岐に渡り、弥生時代後期初頭を中心に縄文時代晩期末、古墳時代後期～奈良時代、中世前半におよぶ。まだ、調査途上であり、断定は避けたいが、今年度調査部分の微高地は、弥生時代後期までは集落域として、古墳時代後期以降は耕地として利用された可能性が高い。以下、各期の主要遺構と、今回確認できた弥生時代後期初頭の土器群について簡単に紹介する。

縄文晚期の遺構の可能性が高いものにSD11, SD03下層土壤等がある。縄文晚期終末に比定される口唇部に刻み目を持たない突蒂文土器・石錐その他の石器を出土している。

弥生時代後期初頭の遺構群は極めて限定された期間の所産で、竪穴住居二棟、堀立柱建物十数棟、素掘り井戸の可能性が高い土壤、溝などがある。竪穴住居に比べ、堀立柱建物が多数検出されている点が興味深い。多くの溝の中でもSD01, SD09, SD10からは、多量の遺物が出土している。また、SD09, 10は、上面幅約6m、深さ0.6mを測る大規模なものである。出土遺物としては、多量の土器と共に打製石包丁等の石器、銅鏡がある。

古墳時代後期～奈良時代には、数条の小規模な溝と包含層が見られるのみである。居住の痕跡は認められない。

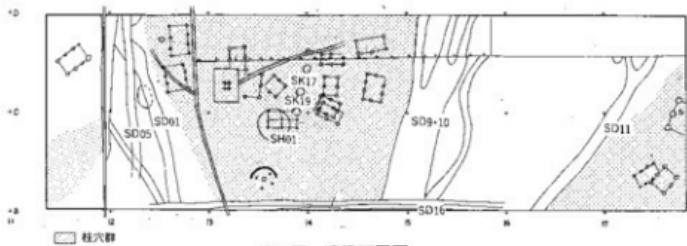
中世前半には、三条の溝状遺構（SD02, SD16, SD16北）が見られる。これらは何れも、旧香川郡条里の坪界線相当部分を走っており、高松平野で初めて確認された埋没条里遺構の可能性がある。出土遺物が少ないため掘削時期は明らかにし得なかったが、鎌倉時代後半を相前後する

時期に埋没した可能性が高い。

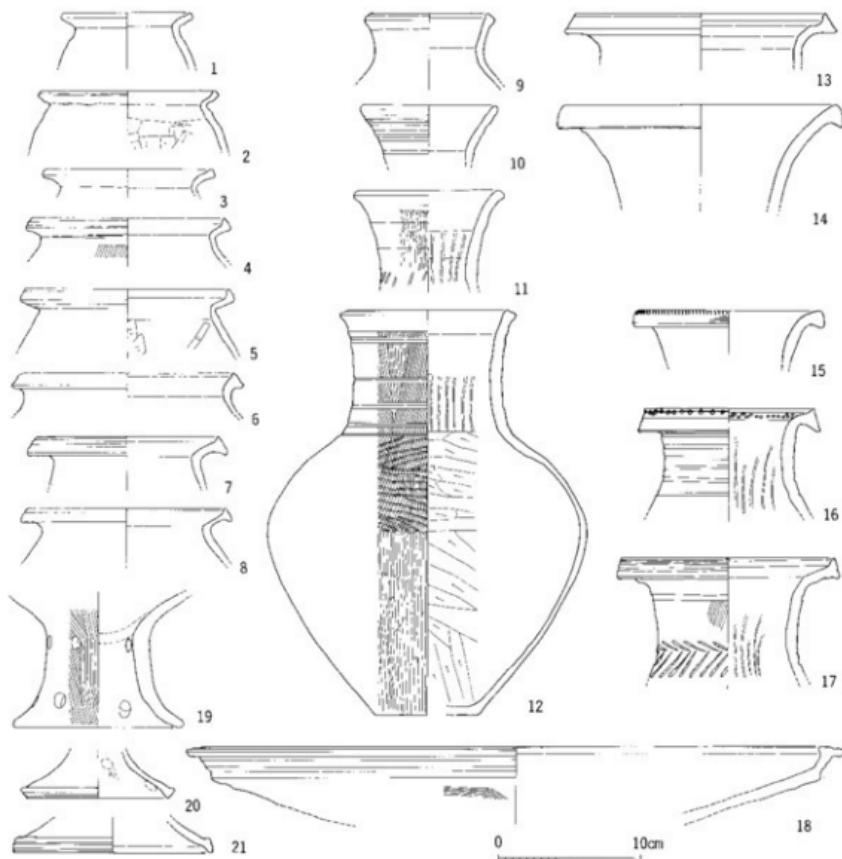
次頁に示したのは、SK19出土の一括資料である。本土壙から壺9点、壺11点、高杯3点等を出土したが、21点を図示した。甕は口縁部の形態から、端部を拡張しないもの（1～3）上方に拡張するもの（4、5）、上下に拡張するもの（6～8）、に区分できる。また、各々凹線の有無によって細分しうる。いずれも茶褐色を呈し、角閃石を多く含む。壺は直立気味に立ち上がる頸部を持つもの（9～12）、大きく開く口縁部を持つもの（13～15）、直立気味に立ち上がり、端部を上下に拡張するもの（16、17）の三種類に分かれ。また、細部の装飾を見ると15は端部に刻み目、16は竹管文、17は頸部へら状原体の押圧文が見られる。甕同様に多量の角閃石を含む。高杯は、口縁端部を内外に拡張し、拡張面に三状の凹線を施し（18）、やはり、角閃石を含む。19～21は脚部片である。

上に示したSK19出土の土器群は上天神遺跡検出の後期初頭土器群の平均的な資料である。第一に胎土が特異な点が注目される。暗茶褐色を呈し多量の角閃石を含むもので、後期後半に播磨・阿波・讃岐・吉備の各地方で「雲母土器」、「播磨系土器」、「讃岐系土器」等と呼ばれる系統関係^(註)が不明確な土器群の胎土に酷似している。ただし、後期後半のこの土器群は同期の全器種を網羅するものではなく、特定の形態、製作・調整技法を持つ一部の器種に限られており、例えこの種の鉢形土器は存在しない。その点で、すべての器種を網羅する上天神遺跡の後期初頭の土器群とは異なる。また、同じく多量の角閃石を含むとはいって、後期後半の土器群のほうが全体的にはるかに精選された、粗粒の混じらない胎土を用いている。以上上天神遺跡の角閃石土器群について、後期後半のそれとの異同を簡単に述べたが、この点についてのより詳細な比較、検討が今後の重要な課題であろう。本報告時に果たしたい。

(註) 「雲母土器」と称される事が多いが、実際には、上天神遺跡出土土器同様に黒雲母片ではなく、角閃石が多量に含まれるようである。



第1図 遺構配置図



第2図 遺物実測図



第3図 上天神遺跡中央部遺構検出状態



第4図 SD01土器出土状態

高松東バイパス試掘

所在地 高松市林町・六条町 調査期間 昭和62年10月5日～10月31日

香川県教育委員会では、昭和62年度より、3回に渡り国庫補助事業で、遺跡詳細分布調査を実施してきた。58年度は、中瀬地区（4市9町）を対象に分布調査を実施し、当該地の遺跡数37.7件増という成果を上げた。61年度は、計画中の四国横断自動車道（善通寺～高松）・国道11号線高松東バイパス等の予定地内の埋蔵文化財包蔵状況を的確に把握し、対応策を立てるという目的から、これらの用地内における分布調査・試掘調査を実施した。以上の詳細については、既刊の報告書を参照されたい。



高松東バイパス試掘位置図

本年度は昨年度に引き続き、進行中の国道バイパス等の建設計画に対応するための分布・試掘調査を計画した。結果として、用地買収も進んでおりこれらの中でもっとも急務と思われた国道11号線高松東バイパス予定地内高松市林町・六条町地区的試掘調査を実施した。

当該地は、高松平野東部春日川西岸の沖積地で県道空港線から春日川古川までの間延長1.5km総面積6万m²に広がっている。現況は大部分が水田。西端で標高約11m、東端で標高約9mと春日川に向かって僅かに下降する平坦な地勢である。

当該地では、調査前には旧山田郡の条里地割が全面に広がっていることが知られているほかは、塚一基の所在が確認されているに過ぎなかった。しかし、地形的に見て、高松平野の中でも非常に安定した部分であるし、同様に遺跡分布の不明確であった西接する高松市太田地区で分布調査の結果、多数の遺跡が確認されたことからも、多数の埋蔵文化財が包蔵されていることが予想された。

調査方法は、四国横断自動車道（善通寺～豊浜）予定地の予備調査と同様に、道路予定地の両側に幅約2mのトレンチを連続して設定する方法をとった。62年10月の約一月間をかけて、未買収地・水路道路部分を除く対象地の両側の大部分にトレンチを設定して、遺構・遺物の包含状況を確認した。

試掘調査の結果、当該地は、微地形的には三群の微高地とその間の低地・旧河道部分からなり、条里遺構を含めて、疎密はあるもののほぼ全域に遺跡が広がる可能性が高いことを確認した。以